表紙, 目次, 雑纂, 漫録, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38525

十全會雜誌

明治四十年四月十六日發行

金澤醫學專門學校十全會

第四十四號
第四十五號
合刊

《非賣品》

十全會雜誌第四十四號 四十五號目次

○原著及實驗

○巨大ナル子宮粘液纖維性筋腫ノ實驗　特別會員　小川勝陳閲
特別會員　八田智証述
○新催眠藥「ウエロナール」Veronal.及「イゾプラール」Isopral.ニ就テ　特別會員　溝口龍三

○雜纂

○煖灸法ニツキテ(一種ノ消炎法)……通常會員　林秀雄

○漫錄

○特別會員に答ふ……八田生
○無題錄……春雨傘
○暮雲……吟雨樓
○塵土集……池田菱吉
○二雨會吟稿……
○二雨會詠草……

○會報

○特別會員動靜○迎送會○湯目先生送別會○劔柔両道部彙報○劔道大會○柔道大會○第三十八回十全會講話會通常會記事○三年の級會○醫學科第二年級々會記事○嗚呼關屋林之助氏○高澤清松氏の訃○吊慰金○下平教授の着報○訂正

○通信

○渡歐日記(下)
○民賢雜觀
○飯森益太郎氏消息

○會告

○寄贈及交換書目○會費領收

○廣告

○十數件

廣告

我が十全會雜誌は編輯兼發行人森島彦夫氏の名の下に發行し來り候ひしも本號より山本兵三郎氏に變更發刊仕候間此段廣告致候也

明治四十年四月

十全會雜誌部

和歌山縣ニ奉職中逝去セラレタル學友關屋林之助君ノ爲メ余輩同窓相圖リ聊カ資ヲ募リ紀念ノ典籍ヲ購ヒ之ヲ十全會ニ寄贈致度ニ付有志ノ諸君ハ御賛助ノ上御出金ヲ乞フ

但シ出金額ハ金參拾錢以上トシ明治四十年四月三十日迄ニ生沼曹六（東京帝國大學醫科大學生理學教室內）又ハ田中一次郎（石川縣金澤病院外科部）両名ノ內ヘ御拂込アリタシ

明治四十年三月

發起人

在東京　生沼曹六
在金澤　田中正一
在金澤　田中一次郎
在金澤　越野義三郎
在金澤　北川健三
在東京　森田齊次

（姓名イロハ順）

廣告

謹啓豫テ諸君ノ御賛成ヲ仰キ計劃致候前本校教授（現京都醫科大學教授）醫學博士鈴木文太郎君ノ肖像畫今回出來相成候ニ付則濟々堂ニ据付申候仍テ發起人ハ茲ニ決算報告ト共ニ此旨票告シ併テ賛成諸君ノ御芳志ヲ謝ス

○醫學博士鈴木文太郎君肖像寄付金決算報告

收入之部

一金參拾壹圓參拾六錢也　收入額

內譯

金貳拾五圓五拾九錢也　寄付金受領高

金四拾錢四厘　銀行預金利子

金五圓參拾六錢六厘　發起人負擔額

支出之部

一金參拾壹圓參拾六錢也　支出額

內譯

金貳拾五圓也　肖像畫工謝金

金五圓也　額縁代

金壹圓貳拾錢也　通信料

金拾六錢也　印刷費

右之通リニ候也

明治四十年一月廿六日

發起人　金子治郎　石川喜直

三本三郎　久保武

○醫學博士鈴木文太郎君肖像寄付金受領高（第參回報告）

受領月日	金額	氏名
明治卅九年十二月四日	金參拾錢	田上清貞君
	金參拾錢	島田吉三郎君
廿七日	金參拾錢	谷口長松君

計金九拾錢也

累計金貳拾五圓五拾九錢也

○下平先生留學紀念品贈呈寄附金

交名第一回報告（送金順序）

一金壹圓　倉重吉次郎君
一金壹圓　河合忠次君
一金壹圓　久津木勝作君
一金壹圓　谷中黎次郎君
一金五拾錢　岩崎勝次君
一金壹圓　吉江桑太郎君
一金五拾錢　鷲山謙吉君
一金八拾錢　田代保二君
一金五拾錢　上原秀三君
一金五拾錢　加藤寛君
一金壹圓　中野玄次君
一金壹圓　濱地藤太郎君
一金五拾錢　河野勇君
一金五拾錢　中村德藏君
一金五拾錢　岩砂鈴次郎君
一金五拾錢　赤倉喜久雄君
一金五拾錢　山田信之君
一金五拾錢　淺利義治君
一金壹圓　若尾隆吉君
一金五拾錢　太田長作君
一金五拾錢　羽根田信次君
一金五拾錢　來間隆次君
一金五拾錢　井上只次君
一金五拾錢　山本重親君
一金五拾錢　柳原久君
一金五拾錢　片山良作君
一金壹圓　館昇榮君
一金五拾錢　井原悟君
一金壹圓　三股梅吉君
一金五拾錢　田中健次君
一金壹圓　小島佐藏君
一金壹圓　杉山政長君
一金貳圓　中西鳥吉君
一金壹圓　城起吾老君
一金壹圓　高松多齊君
一金壹圓　渡邊十治君
一金壹圓　松田研吉君
一金壹圓　石橋四郎君
一金壹圓　諸角友平君
一金五拾錢　上田茂君
一金五拾錢　安積鼎君
一金五拾錢　河野益躬君
一金五拾錢　清水秀夫君
一金五拾錢　吉井康次郎君
一金五拾錢　後藤義賢君
一金貳圓　榛葉左傳君
一金五拾錢　窪美一久君
一金五拾錢　一宮重之助君
一金五拾錢　吉田幡誠君
一金壹圓　野村亮吉君
一金壹圓　高田文齊君
一金五拾錢　津田作平君
一金壹圓　松王數勇君
一金五拾錢　山下振吾君
一金五拾錢　森田信雄君
一金五拾錢　田村圓四郎君
一金壹圓　小幡學雄君
一金五拾錢　小林茂樹君
一金六拾錢　百谷義一君
一金五拾錢　花岡佐太郎君
一金五拾錢　佐々木辰實君
一金五拾壹錢　瓜生尹重君
一金壹圓　飯森益太郎君
一金五拾錢　田中正一君
一金五拾錢　八田智証君
一金五拾錢　鴨脚光榮君
一金五拾錢　吉尾開道君
一金五拾錢　石坂直次郎君
一金五拾錢　崎達郎君
一金五拾錢　島誠郁君
一金五拾錢　近郷重孝君
一金五拾錢　齊藤義雄君
一金壹圓　關屋林之助君
一金壹圓　橋本喜久三君
一金壹圓　都築熊藏君
一金五拾錢　甘利昇君
一金壹圓　藤波謙君
一金五拾錢　高橋半也君
一金五拾錢　須貝璋太郎君
一金五拾錢　鎌田勘之助君
一金五拾錢　安田三木君
一金壹圓　谷口長松君
一金五拾錢　高畠一二三君
一金五拾錢　松井梅次郎君
一金五拾錢　村上麻次郎君
一金壹圓　山本幹雄君
一金五拾錢　谷澤一郎君
一金壹圓　北川健三君
一金五拾錢　三木三郎君
一金五拾錢　八牧政孝君
一金五拾錢　齊藤房吉君
一金五拾錢　渡邊復介君
一金五拾錢　神岡藤一郎君
一金五拾錢　熊西仲藏君
一金壹圓　小西俊三君
一金壹圓　野農利七君
一金五拾錢　林政雄君
一金壹圓　增田貞吉君
一金壹圓　神坂勇治君

計六拾九圓九拾壹錢

右廣告候也　明治四十年三月　發起人

○迎送會決算報告

佐々木教授を迎へ下平教授を送り、新任せられたる島田田中林三講師歡迎をも兼ねたり

收入之部

總計金九拾壹圓四拾錢也

內譯

金壹圓六拾錢　特別會員八人分

金參圓四拾錢　醫學科受驗生十七人分會費

金貳拾圓八拾錢　仝　四年級百〇四人分會費　太田君野村受取ル

金拾九圓八拾錢　仝　三年級九十九人分會費　小林受取ル

金四拾五圓八拾錢　仝二、一年級二百廿九人分會費　太田山本兩君ヨリ受取ル

支出之部

總計金八拾貳圓四拾七錢五厘也

內譯

金參拾錢　茶代

金參圓　菓子折詰六箱代

金貳拾七圓　菓子包五百四十人分代

金參圓　講談師へ謝儀

金壹圓　挿花代

金五拾五錢　捧書及西洋大板紙代

金壹圓〇貳錢五厘　ハンカチーフ其他四点代　太田君へ渡ス

金五拾錢　小使手當五人分

金貳圓六拾錢　余興雜費幷ニ荷物運搬料

金參圓七拾錢　寫眞代(原板料增燒共)

金貳拾六圓　純金製メダル一個代(下平先生へ贈呈ノ分)

金拾參圓　銀製三ツ組盃(桐箱付)代(松浦先生へ贈呈ノ分)

金七拾五錢　郵稅、爲替料及ビ小包料

金參拾五錢　便利屋拂

殘金八圓九拾貳錢五厘也

右之通ニ有之候也

明治四十年一月　日

委員會計掛　(醫三)小林進㊞　(醫四)野村義雄㊞

追而右殘金ハ委員會ノ協贊ヲ經テ處分可仕其レマデ會計掛ニ於テ固ク保管可致候

雜纂

○煖灸法ニツキテ（一種ノ消炎法）

通常會員　林　秀雄

光榮アル本誌上ニ於テ、自分如キ小兒ガ彼此トキイト風ヲスルノハ、諸賢ガ虎威ヲ冒ス譯デ、恐懼ニ堪ヘナイガ、小供ハ小供相應藪鶯ノサヽ鳴キ、寛弘ナル諸賢ガナンデコンナコトヲ咎メラレヨウト自分カラ心ヲ强フシテ筆ヲコスリツケル次第デアル。

サテ煖灸法トイフモノニ就テ知リソメタノハ、四五年前ノ事デ、今ハ故人トナツタ一老人ニツイテヾアル、ナンノ今カラ思フテ見レハツマラヌヨウナモノダガ、メレデモ其老人ニ取ツテハ中々ノ誇デアツタ、實際割合ニ効ガアツテ、煖灸ヲウケニクルモノモ少ナクハナカツタ。

進歩セル醫學上ヨリ見レバ、單純幼稚毫モ顧眄ニ價スベキモノデハナイガ、尾花ガ露ニモ月ノ光ハヤドス譬、フトシタ機轉ガ意外ノ結果ヲ來サザルニモアラズダカラ、コレニツイテ多少研究（ト云フ程デモナカロウガ）シテ見タラ或ハ意外ノ効力ヲ認ムルコトガデキルカモ知レヌ、トニカク長口上ハ扨トシテ本文ニ入ロウ。

一、煖灸法トハ如何ナルモノゾ、

煖灸法ナドヽ氣取ルコトモナイ極單純ナモノデアル、實際老人モ別ニ名ヲツケズ、只「ダンズル」トイフ言葉ノ下ニコレヲ行ツテキタノダガ、名前好ノ今ノ世ノ中ヘヽイヤソレデナクトモ、名前ナシデハ紹介スルニ不都合ダカラ、「ダンズル」ナル動詞ノ本體ノダンノ當字トシテ煖ノ字ヲトリ、又コレハ灸道ヨリイデタル變法故ニ灸ノ一字ヲ與ヘテカク名ヅケタル譯デ、命名者ナル自分モ煖ト灸トノ意味ノ矛盾ヲ知ツテハキルガ暫ラクカク名ヅケタノデアル。

扨テ煖灸ヲナスニハ一種ノ器具ヲ要ス、コレモ極簡單ナルモノデ、先ヅ鉄製ノ底アル而シテ蓋ナキ徑一寸高サ二

寸許ノ圓筒ガ必要ダ、カリニ煖筒ト名ヅク、而シテコノ圓筒ノ口ニ適合スベキ木桿三寸許リノモノヲ切ル、コレヲ柄桿トイフ、コレニテ先ヅ器械ガソロツタノデアル。

次ニコレヲ用フルニハ、先ヅ煖筒ノ中ヘ水ヲ$\frac{1}{2}$許入レ柄桿ニテ固ク栓ヲナス、次ニコレヲ火上ニ置キ、ソノ大抵沸騰セルヲハカリ、厚紙ヲ煖筒ノ底ニアテ、あまれるニテ全体ヲツヽミ、ソノ上ヨリ、柄桿ヲ握リ、豫テテ樟腦精ヲ塗布セル患部ヲ處々轉移シツヽサムル迄壓煖シ、再ビ他ノ煖灸ト取リカヘ、數回繰カヘスノデ其症狀ニヨリテ一日數回コレヲナスノデアル。

尙畧法トシテ、煖筒ヲ要セズ只五寸許ノ木桿（太サハ前ニ同ジ）ノ一端ヲ火中ニヤキ、沸騰セル湯中ニテ其火ヲケシ前ノ如ク紙ニテツヽミ、患部ヲ壓煖シテモヨイ。

書キ落シタガ、煖ノ底ハ、少シク圓ミヲモタシタ方ガ實際上都合ガヨイヨウデアル、

又老人ハ樟腦精ヲ用イズニ、樟腦ヲ燒酒ニトキテ用イテキタ。

二、其ノ効用

老人ハ打身ニ尤モ効アリ、ソノ他、蹈ミチガヒヤ、腫物ヤ僂麻質斯等ニ大變効能アリト云ツテキタ、ツマリ、其温熱的作用ガ主トシテ消炎的ニ働ラキ加フルニ多少ノ器械的消炎ヲナシ炎生物ノ吸收ヲ促ガスノミナラズ、樟腦丁幾又消炎ニ與カリ、各作用相連關シテ以テ大ニ消炎ノ目的ヲ達スルノデアロウ、殊ニ其吸收ヲ促ガス力ノ大ナルハ、其温熱的作用ノ他ノ同目的方法ニ比シテ强力ナルト且ツ其温熱ノ能ク深部ニマデ徹到スルトニヨリテ知ル可シデアル、故ニ種々ノ炎症ニ對シテ効アルノミナラズ、殊ニ慢性炎ニ對シテハ其作用著明ナルヲ信ズ、老人ガ打身ニ最モ効アリトイツタノニ一致スルノデアル。

而シテコレヲ他ノ諸法ニ比シ見ルニソノ繁雜ナラザル点ニ於テ、ソノ種々ノ消炎目的ヲカネタル点ニ於テ、猶ヨク出色アルヲ見ルノデアル、況ンヤコレヲ實地ニ試ミテ其効ノ甚大ナルヲ知リシ曉ニ於テヲヤダ、コレ則チ小供ノ身モ顧ミズニカク諸先輩ノ目前ヘ出シヤバツタ次第デ

アル。

三、應用ニ就キテ

以上述ベタ樣ニ、諸種ノ炎症殊ニ慢性炎症ニ効大ナリトスレバコレヲ實際上ニ應用シテ其適應症及其程度ヲ知ルコト必要トナル、コレヲ定ムルニハ多クノ實地ノ結果ニ徵サナケレバナラヌ、嘗テ見タル朧ナガラノ記臆ト、以上述ベタル處ニヨリテ、骨關節ノ諸炎症、粘液囊ノ炎症ト、僂麻質斯、神經痛等ニ對シ、多少其適應、程度等ニ就テ推測ナキニアラズト雖モ、不幸ニシテ、未ダ學生ノ身デ實地ニコレヲ多ク試ス機會ヲモタヌ故ニ、コレヲ現實ニ知ルコトガデキヌ、仕方ガナイガコレヲ發表スルコトガデキナイノデアル、否自說ヲナスニハアマリニ博識デアルカラデアル、呵々

實地ノ機會ニ富マルル先輩諸賢ガ銷閑ノ一戲トシテ試メラレ、土ヲ採リテ金トナスノ功ヲナシ給ハラハ、幸甚コレニ如クモノナイノデアル。

漫錄

○特別會員に答ふ

私は雜誌部々員にあらず亦部員たりしこともなく只一個の特別會員たるに止まり雜誌部其物に取りては全くの門外漢である、

曾て小川教授か雜誌部部長たりし時何かものせよとの勸に從ひ不性無性筆取り初めしか緣となり幸に誌上各位に目にかゝるの榮を得たまでゞある、然るに思慮なくも十全會雜誌は婦人科の雜誌にあらずとの批難を蒙るに至りしことありしを以て深く自ら潛越の罪恕すべきにあらずと覺悟し一時全く筆を中絕せり、而も斯る批難や冷評的無責任の議と感ぜし故此頃に至り再ひ海外に在る先輩諸氏の消息などを投し廣く其人を揚くると共に會員各位に近況を御知らせ申す次第である、此等の事の爲に或は雜誌部員と誤られたるものか自己の動靜を會員移動欄に紹介せよと申越さるゝあり或は雜誌の發送を依托せらるゝあり或は名簿の訂正を乞ひ誤謬を指摘し其粗策を鳴らさるゝあり或は十全會は甚た不都合である我々を蔑視し

雜誌すら送本し來らずと意氣卷き給ふあり、此等の注文や實に大に諦聽すべくまた大に顧るに足るものと信ずる、故に今其信托を重んじ其意を致すに吝ならざると共に私も之に因みて少しく苦言を呈し御注意申上げ度いと思ふ

全体私は力めて各位の滿足を充たし御希望に背かざらんと欲する、從て其思ふ所欲する所を遠慮なく思の儘に申さるゝ方に對しては滿腔の喜を以て多大の謝意と敬意を表し且つ大に之を歡迎する者である、何者假令位置に上下の差あり時に前後の別ありとするも同し校庭に出入し同し講堂に學ひしものなれば日夕其母校の狀態を聞き校友の消息を知らんと欲するの情は山河を異にし地を隔つに從ひ愈益切なるものありと信するか爲である、私の敢て其勞を惜まず一に其好意を報ゐんと欲するの微意は全く此よ存するのである

凡て何事によらず事の誤解は極て些細のことより生じ眞相か分つて見れば一笑にすら値せざることが多いのである、事情明ならず爲に思もよらぬ城腑を設くるに至るは慨しく悲しむべきことである、故に可成其間の事情の闇明につとめ行違の依て來る所を究むればこゝに意志の疏通と融和を來し互に手を打つて大笑一番眞に春風に浴するの思かするであらふと思ふ

諸氏試に思へ、雜誌部は部長に教授を推し部員に他の職員及學生を戴くと雖主として其任に服する者は二三子に過ぎないと云つてよいのである、其も他に皆それ〳〵盡すべき業務ある身の只其餘暇を見計らつて事に當る片手仕事よ過ぎないのである固より慰勞や報酬などのあるべきものではない、云はゞ其依囑せられたる義務を人一倍多くの腦と時とを費して成し遂けたる結晶がすなはち一部の冊子となるのである、其人知れず費す勞と時とは中々容易なものではなくまことに想像以上と申して差支ないのである、幸に諸氏の援助と學生の多數なる爲め年々增加して此頃は印刷部數千三百餘に達し郵送に附するもの半數に及ふの盛況である、其發送はいつも一人で名宛丈認むるにも隨分手數である、斯る手數を盡くし快く發送を了るに係らず封箋附にて返却し來るもの時として數十部の多きに至ることがある、やく〳〵發送して此仕末更に送らんにも宛所か分らずよし分つた所で重ねての勞と郵税の無駄とは厄介なること中々小ではない、然るに却て意外のわ叱を蒙り御不滿の御言葉を頂戴するは如何に部員の不快に感する所なるか、チツとは部員の心中ともなり考一考するがよい、人或は云はん專任の係を置けと、而も十全會はそう餘裕のあるものではない、御承知の通り職員の醵金と學生か授業料と共に納むる義務的會

費と特別會員の會費より成るものであつて經費の都合上其運に至りかぬるのである其にも係らず特別會員中往々會費滯納時として數年の久しきに及ぶ方が少なくないのである、一々之を調べて申上げても出來ないことはないが斯る邊にまで充分手が行屆き兼ぬるのである、よし手か延ひるにしても之は主客轉倒で寧ろ各位より時に隨ひ進んで納入すべき義務あるものと信ずる

特別會員諸氏、諸氏は百も二百も御承知の如く諸氏か學校を卒業し各其向ふ處に從ひ四方に散するや、終始母校と功過を頒ち十全會と休戚を俱にし、必す自己の居所動靜を其都度報するの義務あることをよもやれ忘れは致されまい、而して多く冷語を放ち不足を云はるゝ方には此分り切つたる義務を怠る人の尠からざるは誠に遺憾の極である、戰時中陸海軍の方には多少此憂ありしも之は事情止むを得さるものとして今や平和克復重ねての春ともなりし曉、可成此憂なき樣致し度いのである、殊に可及的御氣を附けて頂いたならば名簿の誤脫する憂もなく雜誌の發着せさる恐もなく亦發送に當り大に手數か省かれ相方便宜を極め意志の疏通を缺き冷淡との譏を受けるまでもなしと思ふ、其も煩鎖なる手續を要するのでもなく七面倒なる照會を要するのでもない、タツタ一錢五厘の端書一枚で濟むのである、此僅に一錢五厘で濟む義務を自ら全ふせず他を責むることの酷なる少しは反省して頂き度いものである

今本誌發行に就ては其關係校、院格別に徑庭はない、故に私は母校に最近き病院に在つて各位の態々ものせられたる御好意に對して共々に滿足を得んと思ふの餘り、失禮をも省みず御答旁此の如く蕪辭を呈して廣く御願ひ致すのである、希くは其意を諒として幾重にも御寬容の上萬一各位中他に斯る方もあらば立つて此旨御傳あらんことを望むのである

八田生謹白

○無題錄

○春雨傘

ちら〳〵の小雪やみて、日は溫かく照り出しぬ。

高嶺の眞白なる、大空の靑く澄める、道路の早く乾けるなど、とり〴〵嬉しきが中に、犀水の流れ速きは、山懷に春や訪づれけむ、蛇籠に花の浪は散るなり。

十ばかりなる娘の群れの、れの〳〵衣着換へたるが、美しき糸にて綴りたる手毬を持ちいろ〳〵と打ち語らひつゝ、某寺の門に入りぬ。

門內幾十の女兒は、既に毬つき嬉々として遊べり、い

かなる日なるか。

歸りて問へは今日はそれ涅槃會なればみ寺に詣で匍つきて女の兒の遊ぶなりと云ふ。

あゝ吾れ如來喝仰の念なけれ共、涅槃會と聞けば尊とし、な、幼き昔の思い起さるゝ。

今は世になき祖母の手に引かれて、近所の寺々參りあるきしが、この日、本堂の障子を左右に開きて、紫の慢幕さげ、極彩色の涅槃像懸けて、雛僧の經讀み居しを、朧に覺へはべるなり。

八角堂法藏寺と呼びしは、物凄き程人氣稀れなりき。和尚樣と云はで活き佛といひき、ろの聲さへ知る人あらねば、ろの面いかでかは見む、青みどろ池を鎖し、苔は青疊の露を置きて冷たく、寶篋印塔の法鈴、風に鳴るさへ襟許寒かりしが、この寺の涅槃像の大にして精巧なりし事今に忘れず。

天女、人間の泣むよりも、象虎などの牙を伏せ身を軀めて歎く繪像のまたなく面白く、鳥蛇は更なり、虫けらまでさめ〴〵と打ち哭き居り、一味悽凄の氣一幅の畫圖に溢れて、老ひたるは南無佛を唱へ、あれを見よ、兎も龜も泣きて居るよ、樹さへ枝を垂れ葉を落せり、この繪卷かく悲しけれど、四月八日こそは百よろこびの懸物とかはり、花御堂の牟尼佛に產湯注ぎまゐらせむと云ふに、吾は階段飛んで降り、また手を引かれて次なる寺にと行きし。

涅槃像には五十二類、天道、人道、地の三十六禽、洪河の鱗魚、天地の間に生を受たるもの皆愁歎の容形を畫く、二月のわかれ、佛のわかれ、去りし佛など云ふ、楞嚴經に言ふ如く涅槃の清淨不死不生之地、一切脩業者所依歸とあり註して超脫輪廻出離生死之地とせるを以て見れば死を云ふにあらざらむ、如來御年七十九、二月十五日大衆に示し已りて、頭北面、西右脇にして滅し給へるは入滅品に記されたり、

中學にありて增鏡まなびける時「かのきさらぎの中の五日は、鶴の林ゑ薪つきにし日なれば」とつくも髮の媼の云ひたるも、げに今日のことなりと思へば、さすが昔のなつかしく、百に近かりし級友の、如何に何處にと回想の流れは盡きず、人は順流の寵兒にて、吾れ將た碎くる瀧津瀨の、長き一代を深山がくれに終らむずらむ、されども自ら風月を塵外に覺めて、白眼に世上を見ば、百年の知已もあらむかと、覺束なくも慰むるなり。

面白や、旅に迷ふて、結緣の慈光に遇ひぬ。

○

京ならねば、矢脊、小原女の風流はなくとも、東山よ

り花賣りにくるは、都の春の景物ならずや、吾が幼かりし程は花曇りする朝間より、花召せとてよき聲に呼び歩るきしなり。

狹き庭には花紅葉の要もなし、松は四時の綠にして月雪にも見所あればと、萬事澁味を楯に、氣の毒な位叩きつけて買ふほどに、庭もせに針葉の枝さし翳さすやうになりぬ。

年を記せず、一歲の昔、木蓮の樹頻りに欲しかりしかば花賣りを呼びて聞くに白きは高く、紫なるも少し不足せしが多年の松の御蔭にて首尾よく手に入れ、萩と檜の間に植へ置きたり、樹よく育ち、人同じからざれ共年々紫の苔大きく、花なき庭に驕れる色あり。

春たち春行き、花は一年に一度咲けど、相見ざる幾年、客愁を窓前に嘯く時、鄕里の花信は木蓮咲きぬと報じこしぬ。

あゝ咲けりや。

われ病院の西に木蓮の大樹を見るごとに、すなはち家鄕のそれを想ふ。

○

時なれば春詩あさりて見るうちに、昌齡か詩ゞ興を引きたる、さらばこの措辭の巧と、景と情との調和を其のまゝ移して、さりながら原詩を遠く離れず、また直譯の弊に陷らず、七言五言の絕句も古詩も、吾が普通の諧調を有せる詩形とせむに、國語の意味のまづしきを感ず。

西宮春怨

宮居靜けき花の夜に
王簾まくも物らしや
琵琶を抱いて窺へば
君木隱れのおぼろ月

果して珠は瓦になりぬ、春恨艶ける原詩の風味は浮世繪の銅板摺となりし心地す、第一句は「西宮夜靜百花香」を譯したれど、靜けきが形容詞になりては些か趣を異にしたり、思ふに原詩は方夜之靜其香更遠の景致ならむ、第二句は「欲捲珠簾春恨長」なり、靜かなに西宮の裡、何者の青春の怨に沈める、花光月影、溶として神仙亭樂の鄕なるを、青黛の峨眉打ち顰めては短檠の光まぶしく、獨り長袖を揭げて立ち、殿外窈窕の夜景を觀ぜむに、あゝ春日凝粧上翠樓の身とは言へ賴まれぬ人の心や、閨怨の情この承句に集る寔に懶而不卷と解し能ふ可し、第三句は「斜抱雲和深見月」と云ふ、雲和は瑟ならむ乎、すだれ下せしまゝなれば、一目にろれと見難くて、深くとこそ巧に言ひ廻しつれ、即ち從簾中見の謂ひにあらずや、わが傷心の一節を樂になして彈せば、紛るゝ事もあらむ

と、取り上げたれど、さても心は空蟬の、撥の手たろそかに、思を惹くは簾外桃李の花なれば、窺ひ透かせし心弱さよ、第四句は「朧朧樹色隱昭陽」を譯したり、こは他得幸者所居にして春怨の對境なり、うらみてわびて詠めて見れば、月は朧の薄曇り、西宮の夜は寂として昭陽宮の萬籟は絶へぬ、かの空懸明月待君王の詩も思ひ出され、轉た君寵の偏倚を歎かずんば非ず。

譯詩がたゞ百分の一、題旨に適はゞ幸也

（二）

春眠不覺曉、夢香ばしき折からに
處々聞啼鳥、鳥ころ來鳴け朝日影
夜來風雨聲、思へば夜半の雨風に
花落知多少、散にし花も有べきを

この譯更に拙し、讀む君試みたまへ。

○暮雲　吟雨樓

（一）

笑ふべき友は多かれど、泣くべき友は少し。燈火消ゆなむとする夜半、ひとり、離々たる、哀雁の空を渡るを聞きては、何とはしらず、涙潸然として下る、あゝこの時ともに袖絞る人のあるならば、我が心いかに慰安を覺ゆべきを。

（二）

我れは胸の思を筆にのぼさんとして、幾度か紙をのべつ。しかも半ばならずして筆を投げ、紙を裂きぬ。思徒らに長く心只哀しむ。もしこの默思を抱きて、とこしなに眠りなば、いつの世に人の知るあらむ。

（三）

雲西に流れて世はまさに暮れなんとす。我れ只一人遠き野末に立ちて天のひろきを仰ぐ、冥々たる暮禽空に畫ける如きを見て、我が心平かならず。あゝ我れに一双の翼をあらしめよ、高くかの雲外に飛揚して、我が聲のあらむ限りこの悲情を高唱せむかな。

（四）

去年の夏、房州を旅しける時、夕ぐれ白濱より館山への峠を越へぬ、夕靄低く覃めて、蒼然たる暮色地を壓し來りしとき、疲れし足を引きつゝ友と只二人、人なき山路を辿りき、寂然たる思ひに泌みて、友語らず吾れ云はず、路傍の叢に清香を吐く白百合の花を見つ、首を垂れて默然として歩みき。この時敬虔の念油然として胸に湧き、我れ我を忘れじ去りぬ。其の何故たりしかは今尚知らず。

（五）

人あり來て我が胸に刃を當つるあらば、我はまさにいかにすべき、笑てその刃を受くべきか、我れは尙ほこの世になすべき事の多くを有せり、拳をあげて、彼れの巨手を拂はんか、樂しきエデンは夜毎の夢に入りて、神我れを招きたまふこと切りなり。あゝ我れ如何にすべき。

（六）

紀路の朝霧に馬子が歌ふ追分をきゝつゝ、刀根の夜船に舟夫が欸乃の一曲をきゝしも、思へば過ぎし昔とはなりぬ。されば我が胸中の悲や、今も尙ほその時と同じ、あゝかく未來永劫が胸中に悲のかげ消え去る折りはあらざるか。

（七）

我れは夢に向て深き感謝を捧げむと欲するなり、一日の勤めに頭いたみ心疲れて、冷たき衾の上に靜かに身を横ふるの時、來りて我れを慰め導き、世になき人に會はしめ、あらゆる靈術を盡くして、我を樂ましめ、我を慰むるものは、あゝ夢、夢なりき。夢よ、とこしえに夜々の我が眠りを守れ。

（八）

晴れたる夜、高きに上りて市街を望む、戸々の紙障に映れる火かげのいかに平和の相を現すを見ずや、人は皆晝の疲れを休めむとて、今やたのしき臥戸に入らんとすらん。あるは若き妻が心づくしの夕餉に向ひ、一杯の酒に快く醉ひて、節面白きざれ歌をうたふもあらむ。更に見よ、黑き家の上にゝ數多の星またゝきて、彼等が眠りを守れるにあらずや、あゝ平和なる夜よ。さるにこゝに一人、此樂しき平和の境に入る能はずして、悶え苦しむ若き子あるをあゝいかにせむ。

（九）

運命の神、汝我に對て何ぞつらきや、されど我れは今汝に一片の謝辭を捧けむとす。汝が手の冷たき我が胸の上に觸るゝ時、我が血燃え、我が心昇る、銷沈せる我が意氣は勃然として勇めりき。あゝこれ皆殘忍なる汝が賜にあらずして何ぞや。つらき運命の神、願はくば汝が冷酷なる爪牙を益々銳にして來れ。

（十）

宇宙の間人間ほど、罪あり汚れあり、知惠あるものはあらざるべし。

（完）

○塵土集

元旦試筆　池田菱吉

又見乾坤日月新　書窓不止舊年塵　落莫猶作金城客
閑散還迎茅屋春　頭膝不屈非爲費　米府數空眞赤貧
何時歸去尾灣上　起捧壽觴祝老親

次池田君韻　　點　玄　道　人

歳月日新日又新　不勤拂拭萬古塵　雨中初作金城客
雪裏幾逢麗澤春　十年靜坐觀無字　百里遠遊忘赤貧
失笑先生不惑父　起居尙勞耳順親

贈湯目敎授　　同

塵埃堪絶臥龍雪　名利暫忘兼六花　莫道舊人須再顧
松杉高處是吾家

逸　題　　同

三千餘年難拂塵　何緣今日遇佳辰　臥龍山上雪中客
浴得洗心庵裏春

步劒虹生韻　生未見友在西藏　同

四十無聞吾將老　空拳欲拂滿身塵　朔風夢破書窓下
遙思遠征千里人

塵世有無中　何論窮與通　醫王頭尙白　犀水渡春風

寄土肥鶚軒

波山蹈綠蘚　霞浦濯紅塵　回憶會遊跡　孤燈殘夢新

○二雨會吟稿

在高岡鈎雪、在須磨呼潮両詞兄より遠く本會に玉吟を寄せらる、實に本會の光榮となすところ、謹んでその厚意に謝す（雨）

松に伏す磯のわら家や初からす　鈎　雪
元朝の雄松雌松や幼稚園　同
福曳や景品嵩む小水引　同
毛布着て懷舊談や君と我　同
毛布着て妻たる君子の文を懷ふ　同
書初の書院明るし寒椿　同
このわたや佐渡に寒かる島司の子　同
このわたや糟糠の妻はでやかに　同
このわたに能登の泊りや海の音　同
句を案ず浪々の身や春星忌　同

初秋須磨十句

月や今登るところを帆舟ゆく　呼潮
松の枝の相迫るところ月登る　同

月下釣舟二句

先登第一月にかざしぬ太刀の魚　同
大聲に舟子相呼ぶ月下哉　同
名月や遠くはなれて星一つ　同
芋の月此村の僧尺八をよくす　同
月よ照る雲面白や野分の夜　同

病　舍

毛布きて獨り月見よ耽りけり　同
初汐に下葉ぬれたり月見草　同
初汐や新酒ふるまふ舟の主　同
草餅に若かりし妻悼みけり　翁馬

紅梅の里に訪ひよる日傘哉　同
所作もなく牛啼く里の日永哉　一星
菜の花や泥にまみれし男の子　同
晴嵐や笠かたむけて渡月橋　白雨
よしあしの芽や湖の春の色　同
すみれ草昔の戀もなかりけり　雨橋
若鮎の群れや玉しく川底に　同
桃の酒嫁ぎし姉を醉はせまく　同
花の雲博覽會の上野かな　同
若草の何いたからむ東草履　同
鞦韆に貴夫人めせり未開紅　同
夕月やおろすに惜しき紙鳶の風　同
石を切る御影の里や燕飛ぶ　雨城
舟近く燕飛ひゆく汐干哉　同
女醫の名の札新らしく松の花　同
石門に馬車の客あり松の花　同
春の夜を讀みつかれけり山家集　同
蛙なくや遠き廓の薄灯　同
そぼ降や蛙なく夜の物思ひ　同

○二雨會詠草

君とせが手取川そひ春の夜の月は海路にうすくもりして　池部雨橋

桃の花生垣越へて咲きこぼる丹塗の壁よ小格子の門

湧くれば一つになりて遠き野をさまよひ行くか小村の春に　和田翁馬

きぬた貝梅の花貝さくら貝結ばぬ髪よ眞砂の濱に

川ぞひのともし火二つほの見ゑて墨繪に似たる朧夜の路　野村雨城

解きあまる五尺の髪にもつれては水際の柳君によき里

朧ろ夜を東に落ちむ姫君のみ舟かくれし花吹雪かな

さきつゞく櫻三里のたぼろ夜に友がすさびの落城の曲

藤の里うす紫の夕水にすがた寫して微笑む二人

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

會報

○特別會員動靜

年茲に新なる戢兵第二の春、祥瑞六合に洽くして熙々雍々たり、萬々歲翠重なる門松の邊、輕風袂を拂ふ軍艦旗の下、捷て兜の緒を締むる我校出身海軍醫官連、屠蘇の加減やいかならん、今次歸省す三野中軍醫傳ふる所左の如し、

韓國元山防備隊軍醫長（横須賀港務部軍醫長兼横須賀豫備艦部軍醫長）	少監　鈴木寛之助
金剛兼比叡軍醫長（在舞鶴）	大軍醫　中野才幸
佐世保水雷團第八驅逐隊附（横須賀水雷團附兼横須賀海軍工廠附）	大軍醫　武田正壽
磐手艦乘組（目下横須賀港佐世保所轄）	大軍醫　大西瀨治
南清艦隊伏見乘組（上海）	中軍醫　土田久三郎
海軍練炭新造所附（周防國）	中軍醫　堀井吉平
佐世保海兵團附	中軍醫　越田信吉
待命（佐世保）	少軍醫　佐々木辰實
横須賀海軍機關術練習所附	少軍醫　伊藤顯德
横須賀海軍病院附	少軍醫　長井運男
海軍軍醫學校練習學生	候補生　小出眞次郎

＊　＊　＊　＊　＊

右の內鈴木少監には戰時中少しく不豫の醇ありしも一日四回攝食療法の結果强壯肥大殆んと見違ふ斗なりと云ひ、土田中軍醫には日本海々戰五日前急に轉任の命に接し頗る脾肉の嘆に堪ゑざるものありしが先頃磐手乘組となり派遣艦隊として米國を訪問する所あるべしと云ひ、三野中軍醫には戰後竹敷要港部より武藏艦乘組となり久しく北海警備の任に在りしか昨秋横須賀歸航の上佐世保海兵團附となりしもの、又佐々木少軍醫には神經衰弱症にて待命加療中と聞く、

＊　＊　＊　＊　＊

○笠雋吉郎氏　昨秋上京、花柳病豫防學會第一回講習を卒へられしか、更に今回落成移轉の傳染病研究所に入學、來る四月の候を卜し鄕里福岡縣糸島郡怡土村末永に於て開業せらるべし

○加藤寛氏　一昨春獨逸に留學すべく金澤病院佐々木內科を辭せられしも母堂大患の爲其意を果す能はざりしが來る二月いよ〳〵單身渡歐の途に上らるべし

○猪木彥助氏　金澤病院婦人科醫員奉職中の處新春早々

下ノ關市小林病院婦人科主任として赴任せられたり、因に同院には既に外科主任として關啓次郎氏、附屬長濱病院主任として岩砂鈴次郎氏各敏腕を振はれつゝあるなり

○富田敦貴氏　過般江沼郡大聖寺病院を辭し東上、大學外科部にて研學せらる

○宮越常次郎氏　召集解除後越前鯖江町土屋病院に入り河合鷺氏を助けて勤務せらるゝと云ふ

○谷澤一郎氏　三等軍醫として姫路在任中の處舊臘關東陸軍倉庫附として大連に赴任せられたり

○筑紫季雄氏　縣立福島病院眼科部長たりし氏には昨夏縣立廣島病院眼科部長に轉し令閨あり

○堀大次郎氏　同しく廣島病院調劑所長として就職

○福岡喜洋氏　召集解除後市立傳染病院なる當地櫻木病院に入り上田醫長の下孜〻研鎖怠なき氏には陽春四月傳染病研究所に入學せらるべしと云ふ

○岡島敬治氏　豫備步兵第五十七聯隊附として最遲く出征し奉天會戰に多大の殊勳を奏せられたる同氏には昨秋京都大學解剖學教室を辭し長崎醫學專門學校教授となり教鞭を執らる

○島誠郁氏　召集解除後直に上京、三浦內科に入り勤務せらるゝ傍ら三輪小兒科をも研習せられつゝあり、聞くか如くんば一兩年の後父君と反對なる犀川方面に於て別旗を擧けらるゝ考の由なり

○村田讓氏　同しく田代醫整外科ゑ勤務中なり

○太田精一氏　島氏と前後して上京せられたる氏ゑに其后令閨を迎へ佐藤外科勤務中なり

○松尾數男氏　ペスト豫防に對する臨時檢疫事務官として神戸に在り

○關屋林之助氏　仝しく檢疫官として昨秋十月和歌山に赴かれたる休職石川縣技手仝氏には恪勤の譽高く精勵人に絶するものありしも、此人にして此疾ありとも云べき舊痾頓に重を加へ、去十五日夜任他に於て溘焉易簀せられたり、而して遺兒尙幼未た東西を辯せず、まことに痛惜の情に勝ねざるなり

○澤田定信氏　靑森病院外科部長なる氏には展墓の爲め去紀元節十年ぶりにて歸省せられたるが年來高度の近視に伴ふ後白內障を患ひられしことゝて直に金澤病院眼科部入院、高安博士の手術を受けられたり、二月廿二日夕金谷館に於て高安博士並に加藤慶三氏發起の下に歡迎を兼ねたる懇親會あり、參する者山碕小川宮田高安の各教授、三木兄弟田中（一）八田の病院連、並に津川岡田森島大木沖野藤井山田（孝）島田生駒河村（賢）の開業諸氏、即ち舊知あり先輩あり後進あり、笑聲歡聲堂に溢れ主客陶然興盡くるを知らず席上在獨の飯森敷波両氏に宛健康を

祝するの寄せ書などありて散會せしが、開會に先つて加藤發起人の父危篤の電報に接し倉皇辭去せられたるは一同の同情に禁ぜざる所なりき

因云、氏は明治廿四年第四高等中學校醫學部首席卒業にして鄕里石川郡戸板村字示野に開業せられたるも、廿七年金澤病院外科部に入り親しく木村博士の薫育を受け頗る得る處あり、三十年函館桑原病院に赴き、卅三年八月青森病院に轉任、今日に至りしものにて今回辭職の上全市蜆貝町に於て外科病院を建て開業せらるゝ都合なり

○河合忠次氏　昨秋在鉄嶺關東陸軍第一建築斑附より歸還召集解除せられたる豫備三等軍醫なる氏には今回滋賀縣彦根病院外科部に赴任せられたり

○高伊三郎　久しく第十六師團歩兵第五十六聯隊附三等軍醫として北滿州に在りしか今回在弘前三十一聯隊に轉任せらるゝに至れり

○谷澤一郎氏　三等軍醫として舊臘姫路歩兵第四十聯隊より在大連關東陸軍倉庫部附に轉せられたるに今回更に高氏の後を襲ひ五十六聯隊(公主嶺)に補せられたり

○清水秀夫氏　二等軍醫なる氏には舊臘陸軍軍醫學校を卒へ復隊(工兵第九大隊)せられたり

○羽根田信次氏　仝しく歩兵第三十五聯隊の氏も右仝斷

○吉井康次郎氏　仝しく歩兵第七聯隊附なる氏も右仝斷

○小島顯次氏　仝しく輜重兵第九大隊の氏には新年早々軍醫學校に入學せらる

○宮井勇氏　曾て金澤病院眼科部を辭し越中福岡町に開業せられたる氏には、豫備二等軍醫として召集解除後更に令閨を携へ遠く安東縣に赴き開業せられたるに日尚淺きに係らす頗る令聞あり診を乞ふ者門前市をなすの盛況を呈する由にて昨夏旅行せられたる八田氏に對して非常なる優遇と便宜を與へられたりと云ふ　清國安東縣右堂前街十三號地

○敷波重次郎氏　夙に本校を出て仙台醫學專門學校解剖學教授として昨春渡歐せられたる氏には無異健康日夕研究に力められ左の所に寓せらるゝと云ふ

J. Schikinami
Schönlein Str 8III
Würzbüng
Deütschland.

○北川光雄氏　昨年來東京帝大醫科大學整形外科教室に孜々研學中の由

○松原佐武郎氏　昨秋卒業後新潟市新潟病院に奉職せられつゝある由

○足立諒氏　目下金城療病院に奉職中

○加藤寛氏　一昨春獨逸國に留學すべく金澤病院佐々木内科を辞せられしも母堂大患のため其意を果さる能はず本年三月に至り浦港を經て西比利亞を横斷すべく仝月十日「モンゴリヤ」號にて敦賀港出帆獨逸國に向はれたり

○佐野爲明氏　金澤病院外科第二部醫員たりし仝氏には去月三日補充輸卒として服役すべく輜重兵第九大隊に入營せられたり

○中島誠氏　今回仝部醫員を辞し郷里信州に開業すべく去月十四日歸國の途に就かれたり

○菊池文岱氏　仝歸人科醫員には仝じく開業のため去月末辞職の上郷里秋田縣に歸らるべし、而して病院職員には以上三君の爲め去月十二日金谷館に於て送別の宴を張られたり

○松原氏献氏　現役醫官として第四師團本部に勤務中

○東良平氏　曩に高岡市に病院を開かれ、日露戰役に殊功を建て凱旋せられたる後名聲專ら嘖々たりし仝氏には去月九日俄然腦充血にて逝去せらる、痛惜の至に堪えず

○田村圓四郎、高橋幸七郎、鷲山謙吉三氏は一年志願兵として歩兵第三十五聯隊に入營せられたり

○森義作、岩佐兵藏両氏も仝上

○迎送會

一　佐々木先生を迎ふ

明治三十七年七月吾等は佐々木先生の西航を送り候爾來二春秋先生の温容に接する能はざりしかども絶にず趣味深き有益洒脱の通信を遠く歐雲の彼方より賜はり一同先生御健在の程を祝し居り候

今回期滿ち、萬軍の鵬鴻恙なく故國の山河に接せられ而して深くまた新たなる研鑽の結果を以て後進指導の任に復せられ候は絶大なる吾等の幸福に有之候

されば歡迎を本校濟々堂に開き御滯歐雜談など拜聽仕り候その日の祝辭は吾等の希望を代表致すものに候へば左に掲げ申候

恩師佐々木先生曩キニ鵬鴻ノ志ヲ以テ歐洲ニ遊學セラル、コト正ニ二年專門科學ノ叢淵ヲ以テ世界ニ冠タリト稱セラル、獨國ニ或ハ我邦醫學ノ進歩ヲ示シ或ハ親シク專門大家ニ接シテ斯學ノ澁奥ヲ究メラレ今回學成リ業遂ゲテ歸朝セラル生等ハ造次顚沛念頭ヲ離レザル先生ガ温容ヲ拜スルノ一日モ早キヲ望ミツ、アリシガ今再ビ懇篤ナル先生ノ薫陶ニ浴スルノ榮ヲ得タリ生等ノ至幸何ソ之ニ加カン、冀クバ先生新タニ研讃セヲレタル所ヲ以テ我校ノ爲メニ裨益セ

ラレンコヲ、聊カ蕪辭ヲ陳ヂテ祝詞トナス

明治卅九年十月廿二日　金澤醫學專門學校學生總代　佐口榮

二　下平先生を送る

由來、會ふものは離るゝに定まれり。吾人猥りに婦女子の顰に倣ふて、纏綿の繰言を陳べずと雖も、しかも猶、生等が敬愛慈父に比せる、恩師下平先生と別るゝに當りて、豈一片止み難き惜別の情なからんや。

さはれ、こたび先生と相別る、實に先生の榮譽の然らしむる所、吾人默々、只天の命に從ふのみ、先生夙に俊秀の聞にあり、曩に文部省の拔擇するところとなり、遠く海外に留學せられんとす、先生の榮譽亦極まれりと謂ふべし、生等何ぞ先生との別れを惜しむものならん。

山水風土の異なる地、幸に先生が斯道研學の爲めに自愛せられんことを祈り、高敎に浴せし半千の青年、謹んでこゝに先生を送り奉る

別辭

今ヤ我邦醫學ノ進歩ハ日ニ月ニ精ヲ極メ巧ヲ究ム往日不治ト認定セル沈痼モ亦容易ニ治癒ニ赴キ死生ヲ爭フ危魔ヲ未ダ發セザルニ救濟シ癈ヲ起シ死ヲ回シ人々夭折ノ禍ヲ防ギ萬戶黃考ノ慶ヲ來ス雖然之ヲ泰西諸國ノ醫術ニ比スレバ猶未ダ彼ニ優レリトセズ故ニ我カ文部省ニ於テハ夙ニ鑑ミル所アリ以テ年々歲々斯道ニ勵精ナル秀才ヲ撰ンデ海外ニ留學セシメ益々斯學ノ發達ヲ期セントス今回生等ガ恩師金澤醫學專門學校敎授下平先生ハ文部當局者ノ拔擇スル所トナリ來ル十一月十七日ヲ以テ留學ノ途ニ就カレントス詢ニ慶賀ニ堪エザルナリ先生ガ敏才精學固ヨリ其處ナリト雖モ今日茲ニ先生ト相別ル、亦遺憾ナシトセズ希クバ先生醫術ノ精緻ヲ以テ世界ニ冠タリト稱セラル、獨ニ澳ニ斯學ノ澁奧ヲ究メラレ期滿チテ再ビ歸朝セラル、ニ當リ大ニシテハ邦家ノタメ小ニシテハ我校ノ爲メニ裨益敎導セラレンコトヲ、謹ンデ一言祝辭ヲ呈シ以テ別辭ニ代フ

三　松浦先生を送る

金天白露を滴れて虫聲籬根に咽び、雁陣斜に飛んで覇客の腸を愁殺す、恩師松浦先生我校の敎職に莅み、懇篤なる薫陶を垂れ玉ひしこと茲に一年、今や袖を東西に分ちて已に我校を去らるゝの悲運に際せり、行路朝に越賓を迎へ夕に吳客を送るも猶一夜の緣は以て惜別の袖を惹かむ、況んや師弟の緣あるものに於てをや、嗚呼離合聚散は天地の數、吾人の得て如何ともなし能はざる所、生等は今別るゝに臨んで婦女子の顰に倣ふも

のに非らずと雖も、先生の薫陶を懷ひ、吾人の成効を顧れば、轉た暗涙潸然として滂沱するを禁ずる能はず、只願ふ、先生攝養怠らず自重自愛せられんことを。

生等一同の別辭を揭ぐ

回顧スレバ恩師金澤醫學專門學校教授松浦先生ニ相見エタル實ニ一星霜ノ前炎熱焦クガ如キ八月ノ候ナリキ爾來朝ニ熱心ナル薫陶ト夕ニ懇篤ナル指導トヲ賜リタル先生ガ鴻恩ヤ實ニ偉且ツ大ナリト謂フベシ陰晴定メナキ秋ノ空サラデモ天ハ敢テ生等ニ秋ノ憂愁ヲ頒タント欲スルカ本日干茲コノ良先生ト相別ルヽノ止ムナキニ至レリ生等ノ不幸何ゾ之ニ加ヘン嗚呼生等非才ニシテコノ至大至廣ナル鴻恩ニ奉ジ難シト雖モ今後夙夜碎厲他日ノ大成ヲ期シ父祖ノ偉業ニ愧デザランコトヲ努メ以テ其ノ萬一ニ酬イント欲ス希クバ先生モ亦永ク生等ヲ顧ミ將來ノ指導ヲ賜ヒテ我校ノ爲メニ裨益セラレンヿヲ乞フ聊カ謝辭ヲ陳ヂテ別辭トナス

四　島田、田中、林三講師を迎ふ

我が校の出身にして生等が先輩たる三先生は多年斯道に螢雪の苦を重ねられ、多大の學殖と熱心を以て吾人を訓陶せられんとす、必ずや莫大の裨益を與へられんことを信ず、吾人宜しく奮發すべきなり。

迎三先生辭

金風北陸の野を襲ふて過雁雲影蕭條たる秋の姿を帶びざるはなし。此の時に當り吾等は茲に島田、田中、林の三先生を迎ふ、吾等の喜悅何物かこれに如かん三先生はもと我校にありて夙に俊才の聞高く德望の譽高き人々なりき爾來研學理論に實地に英意よく斯道の研磧を究め給ひて今や芳志を吾等が薫陶に投じ給ふ、吾等の喜悅何物かこれに如かん、嗚呼三先生は我校の出身なり吾等が同窓なり尊敬すべき吾等の先輩なり吾等敬慕の情禁ずる能はざる也。今や吾等が親愛なる同窓尊敬すべき吾等が先輩は來りて吾等後進を導くに努め給ふ、吾等驚なりと雖も先生の鞭韃を得て先生の驥尾に附するを得ば吾等の喜悅何物かこれに如かん聊か所感をのべて三先生を迎ふるの辭となす、

明治卅九年十月廿二日　　金澤醫學專門學校學生總代　酒井碩治

五　會と餘興

迎送會!!

一面には快う勇んで先生を迎へ、一面には悲しう沈んで先生を送る、所謂笑と泣とを一時に演ずるといふ盡梅。尤も會場が濟々堂だけに迎へらるゝ先生も迎へるものも、送らるゝ先生も送るものも、濟々堂々として、漫り

に笑はず、漫りに泣かず、賓は賓、主は主、秩序整然として一絲亂れざる、ろれは高等の敎育を受けて居るだけに感心なものだ。加之、發起人たる吾々が七日七夜も五つ六つの額を集めての密議、準備。會の圓滿に落度なく進行したるのも尤も千萬だ、とは幹事側の自畫自讃！

偖て、五日前から寫眞師を引き連れて（否な引き連れられた方）よき撮影場もがなーと、草鞋がけに腰辨當、これは少し誇張に言い滑つたかも知れぬが、兎に角撰みに撰んだ小尻垂坂の南厓、こゝに六先生を擁し奉つて紀念の撮影をなし、了つて會員一同は踵をついで本日の會場たる濟々堂へと蝟集し來る。

午後二時と覺しき頃、諸先生始め會員一同着席、玆に幹事太田寛市君が流暢なる開會の辭と共に所謂迎送會なる幕は開かる、但しMAの幕にはなくつてよ。

先づ、會の順序として記すべきことは、前項に掲げ來つた祝辭、別辭（紀念として下平先生には純金製メタル一個目錄贈呈、松浦先生には純銀製三ッ組盃目錄贈呈）、歡迎の辭に續いて、一々佐々木、下平、松浦、田中各先生が丁寧なる挨拶の辭や、鄭重なる答禮の辭や、又生等の肝銘すべき懇篤なる訓旨なども賜はり、今更ながら「師の恩」のハ調が繰り返へされて恩師の一言一句、眞に〳〵感涙に咽ばる、敬謝の至に堪へなかつたのも、强ち我一人のみかは。

莊嚴なる式が終つて

○餘興

にうつる、尤も餘興は先年我々が行つた突飛な新奇なる級會から制限せらるゝことゝなつて、思ひ切つた餘興も出來ない。中には隨分團菊に劣らない藝人や、三遊に負けない落語家、ろの他本職を凌ぐやうな花役者もあり、惜しい事にはこの花役者を蕾の裡に葬り去るとは……

……噫！

蛤ならば未だしものこと、蜆が大海の岩がけに吹き立つるも同樣な怪氣焔、何といつても濱の松風音ばかり、馬の耳に風位聞き抗へあれば僕も滿足なれど、雲を擢んで論ずるやうな始末。餘興の前口上は之れで中止して。

本日の餘興は!!!

先呼びものとして林、關根両君の劍舞、守部君の琵琶歌はいはずもがな、吉田君の詩吟、玉森君の手品は已に定評あり、誰やらが北の隅から謠ひいでたる都々逸琵琶歌文句入りの吟詩は大當りにて喝采を博し、太田、寺田両君の「ものまね」は中々の妙腕、牡鷄が牝鷄に遊牝むあたりの一擧一動、聲調といひ風姿といひ、慥かに下手な鷄には摸倣も出來ざるほど、いかに其技の巧みなりしことよ、諸先生始め會員一同膝を拍ち喉を皷らして嘆賞す、

迎送＝笑泣會の笑舞臺は全く之に盡せり。或人曰はく「夫の両君は鷄の生れ變りならずや、よく見玉へ、愛らしき鷄の面影の存するあるを」と、評し得て妙、賞し得て巧。呵々。

この間に茶菓の饗あり、約十分間、談話なく、笑聲なく、只茶を喫する音と、大きな口をパクッかせるあるのみ、左右に走り廻るは幹事の面々、いつもながら忙し想に苦し想に、さても〳〵御苦勞樣なる哉。

尙、余興としては充分書きたつることもあり、褒めそやすこともあり、笑ひ出づることあれども、余り平六に流れ、且つ冗長に亘れば、振風會創設の折柄、世間体へも憚りあり、部長さんからも御小言なきにしもあらねば、こゝら邊に失敬して御免を蒙り、名殘惜しい余興の筆を投ずることゝする！

併し、一旦捨てたる筆ながら、指にても血にても持書すべきことは、當日の余興が臭猥に流れずして學生の体面を汚すことなく、歌ふて舞ふて、語つて笑つて目出たく千秋樂を告げたること。多趣味なる余興に諸先生を始め會員一同が御滿足に見ゆたるは、學余易占研究の僕によめたる次第、幹事一同の光榮となすところ、誤評とあれば何時でも訂正すべく、後日のため依つて會況件の如し

當日の幹事たる各級幹生諸君が幹旋せられたる勞を多謝す（落水生）

○湯目先生送別會

十二月二十日本校を去り給ふことゝなれり、想ふに先生の我が校に教鞭を取られてより爰に數年恰も一日の如く、溫顏以て導き嚴俊以て訓誨し給ひしかば、生徒の先生を視ること父母の如くなりき、然るに今や此親愛畏敬する良先生を失ふに至れり、爰に宴を張り聊か微意のある所を表せんとす、會場は本校濟々堂なるが、ろの裝飾は實に委員の意匠を凝らせしものにしてその美、ろの齊、宛然としてこれ貴顯紳士の宴會場、先生を始め會員一同席につくや、太田委員生徒總代として、沈痛なる語調をもて、先生との離別を悲しみ、且つ微衷を陳ずれば、先生も又席を起ちて懇切なる教訓を賜ひぬ。

こゝに和氣靄々場に滿ち、暫らくは離別の悲みも忘れて笑ひ、錚々たる會員の隱し藝出でゝ餘興賑ひ滑稽なるもの、快活なるもの、續々出で來つて頓智あり、手品あり、狂言あり、劒舞あり、詩吟も琵琶歌もありて、ろの快樂の盡くる所を知らず、互に胸襟を開いて腹の中からの哄笑、實に多趣味なる送別會なりしよ。且つ舞ひ且つ演じ且つ語りしが漸く時の移るに從ひ茶菓の饗應あり、一同半滿腹、再び餘興よ繰り返りて又々笑

顏の共進會となる、六時に近く先生は都合あればとて申出でられしかば委員は茲に閉會の辭を述べ、「湯目先生萬歲」を三唱して散會するに到れり。

附記　當日會員一同は恩師湯目先生を擁して紀念撮影をなし、尙一同より紀念自筆帖一部幷に銀杯贈呈の目錄を呈せり。

○劍柔兩道部彙報

遠くは源平紅白の世、降つて元龜天正の頃はわが國武事にのみ急はしく兜の星影、劍の稻妻、矢叫びの聲は昨日も今日も聞ゆれば、人心も自然殺風景になりて、篠原や人の命の捨てどころ、生は寄なり死は歸なりと、あたら此の世は雨やどり、衣の袖をぬらしもせで、忠君の大義を泰山の重きに置き命を鴻毛の輕きに比したり、されば殺伐の厭ふべきはありしかど尙武の氣は四海に滿ちて、女も弓を引き習ひ、出陣の別れに涙を隱し八幡座に香を燻き籠めたりしやかし、まして男の兒たらむものは、幼うして太刀打の術を覺へ、いざ事ある時んば、身に小櫻の花縅、綠の黑髮大童に、白鉢卷凜々しく結び黃金作りの細太刀佩いて、月毛の駒にや跨りたる昔語りの勇ましきは、時世がさする業なれや、されど昇平三百年花葵の盛久しく軍事幸になかりしかば、漸次士風の衰へたる所に、德川の流れ涸れて、明治維新の活劇、十年の變、再び混亂の國情なりけれどもろの後いつしか春となりて、治まる御代の時津風枝を鳴らさねば、花見る人の長刀もなくなり、弓は隱居の杖に化け、槍は洗濯竿の代りになりて戰を夢みるべくもなかりけり、かくてこそ聖代の俤、上七朝の姿に似て櫻かざして舞ふべきを、一たび治まり一たび亂る孟子の言に懸價なく世界の舞臺ひろまるに連れ、我利我慾の行き止まり、遂には遺恨の火花散らして國と國との諸肌ぬぎ、砲臺堅艦もの〳〵しや、殺戮をエホバの前に行ひ金をとるの、地面をとるのと、思つて見れば高利貸しの、ひやりと膽にこたへて寒し、さればこの、國に生れて男子何の務をかせん、今や文化燦然の電氣燈、照し見る古今東西の書、學問萬能の時代となり質朴の氣は西の海へ追はれ、輕跳の風一國を吹きまくれり、こは憂ふべき事なりと文部大臣命を天下に布いて青年元氣の興振を鼓號したりしかば本校にても早速この主旨を體し、健全なる精神を宿すべき所、所謂智勇兼備の大將を作り上げ靑飄簞を防かんとさてころ一年には劍柔兩道の一を必習科とし二三四年には隨意科とし每週一回出席すべきに定めたり、むざんやな、罪なくして氷点以下の雪降る日にも、つゞれさし子の白襦袢、切腹と云ふ見へ

もしぬめり、されど日を經るまゝに筋骨いつしか固うなりて、力瘤みる喜びは、吾と吾が身の頼もしく、持病の胃弱根切れして、夕餉の膳に下宿屋の婆を驚かせば、頭腦知らぬ間にクリーヤとなりて試驗大敵に悠然たる身構へ雄々しく、胸を叩いて功德讃仰の方もあるべし、

◎劍道部

寒稽古

治に居て亂を忘れざるは先王の敎なり、されば古より天下に志あるものは詩書を涉獵するの傍、常に武事に心を寄せ、所謂文武の士たらんことを欲せり、吾等元一介の學生なりと雖も一旦緩急あれば國家の干城を以て自任とするものなり、豈徒らに机上放言を以て能事とすべけんや、宜しく野に伏し劍を枕にするの用意なかるべからず、此を以て我が十全會劍道部と十二月六日を卜して寒稽古開始の日と定めつ。演武場は例によりて本校濟々堂を以て之にあて、向三十日午後六時より八時に亘る間に最と勇壯に最と活潑に擧行せられぬ。

因云　本年は學期改正の結果二月初旬に前學期試驗行はるゝことゝなりしを以て第一回寒稽古は十二月六日より同二十五日まで第二回は二月十二日より同廿一日に終了せりと。

○寒稽古皆勤者

赤尾肇三　岡田秀造　長田八三郎
高澤冠一　本仙太郎　澤村恒松
佐々木靜　大野幸重　安藤佐吉
鈴木於兎吉　森普次　布目喜多
今井外吉　關戸辰次郎　山田茂樹
野村義雄　植木信親　鷹見義郎
菊田文雄　加茂智榮　中谷豐重
岡部忠清　重野諦　松生哲良
辻口文吉　武長久雄　岡勝重
曾田米三郎　岡本寛　太田勘市
月岡勝治　渡邊關重　堀孝信
小林良司　渡邊順次　高橋重作
名取博三　眞舘修平　吉井直次
田中三彌

以上四十名

◎柔道部

寒稽古

寒燈を剪りて書に向へば感ずることも一入なり、それや一切世間の有情無情を風の拂ひつくして心專念に注けばならし、敢て讀書に限るにはあらず、埋火を抱いて謠曲の寒稽古より、字習ふ道をはげむもあり、水涕すゝつ

て黄い聲の常磐津はいつかるの身を助くるやらむ、敢て諸藝に限るにはあらず、寒製の餅は味甘くて黴生せず、墨は寒中に入りて色いよ〳〵美しく、煙草は官製になりて品いよ〳〵下れり、寒念佛寒參りなんど古き昔の習ひじさすがに哀れなりける、弓矢の道は尙更に猛きを競ふものなれば、三冬の嚴寒何するものぞ氷の刃、霜の劍、飛雪面を削ると云へど丈夫の胸裡正に烈火の燃ゆるあり、れもしろし西比利亞風、いざや爾と戰はんと勇ましき柔道隊の已が友は、いかに雜巾踊をはげみたりけむ、時は十二月六日より二十日間、第一回塞稽古の折は窮除に際して天地も凍れるに、午後六時より最愛の火鉢にわかれ、足駄を履いて門を出づれば粉雪纈紛として眼さへ開け難く雪道の歩みにくゝして幾度か轉はんとするをよくも通ひし九十余名の健兒かな、かくてこの後さる程に學期試驗の壁一重、たゝき破りし二月十二日より第二回塞稽古開始、二回を貫通したる勇士の面々は左に記す諸君也

○塞稽古皆勤者

村　秀雄　太田　勘市　桑原　益方
永井　人雄　宮村誠一郎　關　松平
河合　勝　中谷內君雅　酒井　碩治
小林唯四郎　藤井　最正　上木　隆基
中川　善松　月岡　勝治　辻井禮太郎
岩井源一郎　淵原　隆庵　城谷　博賢
小西　孝德　吉川　友信　佐竹　秀一
佐々木茂樹　重松　威勝　高田　茂一
大井藤次郎　室田　義人　須賀　芳篤
塚本　政次　八賀　重藏　上遠野與作
平野郷次郎　石川　精一　北村　祐壽
相馬甲五郎　關戸辰次郎　坪倉　利
辻口　文吉　小幡　一志　岡部　忠清
高田　信弘　吉田　政信　濱　鉄三
明石　秀次郎　深谷　藤市　中川　良忠
本庶　英猷　表　宣明　弓立　儀一
曾田米三郎　佐藤彌一郎　布目　喜多
大野　幸十　吉井　直次　眞舘　修平
守友　堅二

○劍道大會

時や來ぬ、旌旗は高く天を蔽ひ、貔貅と動く岡の頂麓の野、戰塵簇り起ると見れば早や矢叫びの聲高し。人と生れて武夫たらば死して甲斐ある身なるべし。

二月廿四日の朝露散らし、夕の日影沈むも知らで、力のかぎり戰ひしいづれ當らぬ勇武の士、ろの名をこゝに記

るすも我れ等が譽なり。

○○（安藤佐吉 中谷豊充）
○○（加茂智榮 金子義長）
○○（野村義雄 渡邊關重）
○○（高橋重作 吉井直次）
○○（佐々木靜 堀孝作）
○○（佐々木靜 名取博三）
○○（今井外吉 敷田雄登記）
○○（四中松江常行 武長壽雄）
×○（師橋場興松 本仙太郎）
○○（農杉本金吾 澤村恒松）
○○（四高高田義直 本仙太郎）
○○（三五高田他三郎 若林古福）
○○（四高進藤隆一 矢原準一）
○○（四中千葉清 高澤冠一）
○○（歩七福島又四郎 澤村恒松）
○○（歩七鶴來外次郎 岡田秀造）

○○（關戸辰二郎 太田勘市）
○○（國吉眞才 大橋太一郎）
○○（坪田本照 渡邊順治）
○○（伊藤精一 淺野達也）
×○（鈴木於兎吉 松生哲良）
○○（菊田文雄 岡勝重）
○○（大野幸重 松生哲良）
○○（高橋重作 月岡勝治）
○○（布目喜多 植木信親）
○○（田中信一 山田茂樹）
○○（眞舘修平 岡本寛）
○○（近藤清吾 辻口文吉）

○○（四高谷中峻次郎 今井外吉）
○○（三五宮川竹治郎 角田耕六）
○○（四高渡邊二郎 曾田米三郎）
○○（警前田喜久太郎 岡田秀造）
○○（四高關谷吾一 田中三彌）

○○（四高高田義直 本仙太郎）
○○（三五高田他三郎 若林古福）
○○（四高進藤隆一 矢原準一）
○○（四中千葉清 高澤冠一）
○○（歩七福島又四郎 澤村恒松）
○○（歩七鶴來外次郎 岡田秀造）

○○（高橋重作 吉井直次）
○○（佐々木靜 堀孝作）
○○（佐々木靜 名取博三）
○○（今井外吉 敷田雄登記）
○○（四中松江常行 武長壽雄）
○○（四高增井清三 岡部忠清）
○○（商小銀治直芳 今井外吉）
○○（四高本多氏 絹川義溫）
○○（四中林幸次郎 赤尾肇三）
○○（一中三好直久 森善次）
○○（一中中村秀二郎 澤村恒松）
○○（二中松本亮正 長田八三郎）
○○（三五松島幸太郎 吉田宗一）
○○（二中四久和 小林良司）
○○（歩七北出平太郎 才田猶次）
○○（歩七舟見龜松 高澤冠一）
○○（三五深山新次郎 月岡勝治）

○○（二中池上豊 志村猪藏）
○○（一中八里喜久男 高儀京次）
○○（四高增井清三 岡部忠清）
○○（商小銀治直芳 今井外吉）
○○（四高本多氏 絹川義溫）
○○（四中林幸次郎 赤尾肇三）
○○（一中三好直久 森善次）
○○（一中中村秀二郎 澤村恒松）
○○（二中松本亮正 長田八三郎）
○○（三五松島幸太郎 吉田宗一）
○○（二中四久和 小林良司）
○○（歩七北出平太郎 才田猶次）
○○（歩七舟見龜松 高澤冠一）
○○（三五深山新次郎 月岡勝治）

○○（二中大武國治 絹川義溫）
○○（監平松倫聲 長田八三郎）
○○（監村田清久 矢原準一）

○○（一中泊武治 田中三彌）
○○（四高田島互 才田猶次）
○○（警千秋義章 赤尾肇三）

○○（師吉田清成 岡田秀造）
×○（一中楠正路 才田猶次）

○印ハ勝
三五ハ第三十五聯隊
警ハ警察署
四高ハ第四高等學校
二中ハ第二中學校
師ハ師範學校
農ハ農學校

×印ハ分
歩七ハ歩兵第七聯隊
監ハ監獄署
一中ハ第一中學校
四中ハ第四中學校
商ハ商業學校

大會當日の重なる來賓は高木大佐白水中佐を始め、五十嵐田中の両少佐、白山赤尾両大尉、石平島津穗刈の三中尉、鶴中村萩野上田吉村森田の六少尉、其他諸官公立學校長、職員、北國北陸両新聞記者等無慮五十名。

殊に五十嵐少佐は勤務多忙なるに拘はらず、熱心にも常に我校武道大會に參列せられ、武道を奬勵せらるゝは夙に識者の認めて以て多とするところ、大に本會の榮譽となす。

○柔道大會景況

寒稽古を終つて意氣衝天の勇士等は鉄腕を扼して大會を待つ、時は來れり三月三日、第一日曜を卜して開會す、高安會長、石川部長、宮田教授を初め諸先生の出席あり來賓として講道館六段大日本武德會本部教士永岡秀一先生當地漫遊の好時期に由り、寸暇もなき身を以て特に臨場、且つ親しく審判の勞を執られたるは實に大會當日に於て最も光榮ある事と感謝に堪へざる所、由來技術は井底の管見を避く可く、進歩發達は拔群なる技術そのものを見るにあり、余等冥々裡に感得したること幾何ぞや、この日看客滿場、覇氣堂に溢れたり、開會を報ずるや吉田宗一氏審判の下に三本勝負を開く其の順序左の如し

分　膝車　（小幡一志　守友賢二）
大外苅　大外苅　（高田信弘　辻口文吉）
大外苅　大外苅　（矢原準一　高儀京治）
脊負投　脊負投　（石川精一　大野幸十）
分　（相馬甲五郎　上遠野興作）
巴投　体落　（吉井直治　清水仙岳）
大外苅　大外苅　（中川良忠　表宣明）
拂腰　拂腰　（角田耕六　曾田米三郎）
突込絞　大外苅　（岩井源一郎　藤井最正）
大外車　大外車　（月岡勝次　室田義人）
脊負落　小外苅　（岩越某　金子義長）
脊負落　裏投　脊負落　裏投　（中谷内善雅　酒井碩治）
掬投　（本庶英猷　吉田政信）
逆十字　脊負投　内股　（小林進　弓立儀一）
本袈裟　（深谷合藤市　河勝）
脊負投　脊負投　（關松平　小林唯四郎）
大外車　膝車　（佐藤彌一郎　中川善松）
釣上腰　釣込腰　（塚本政次　佐々木茂樹）
分　（明石秀二郎　須賀芳篤）
（太田勘市　村秀雄）
大外苅　（關戸辰次郎　眞舘修平）
分　（永井人雄　宮村誠一郎）
脊負投　（大井藤次郎　八賀重藏）
脊負投　（重松威勝　上木隆基）
内股　横掛　（山中房次郎　敷田於喜記）

進級證書及寒稽古皆勤證書授與式

（當日大會ニ於テ進級セルモノ）

津田弘　北村祐壽

右三進ヘ昇進セシム

林秀雄　太田勘市　上木隆基
鈴木琢磨　須賀芳篤　高田茂一
志村猪藏　坪倉利　石川玄知
平野鄕次郎　明石秀二郎　江村研正
佐々木茂樹　重松威勝

右四級ヘ昇進セシム

講道館柔道投之形

分　大外苅　二中　（保田文雄　藤村宜一）
大外苅　（城谷隣賢　吉川友信）
大外列　背負投　（淵原隆庵　高田茂一）
脊負投　脊負投　大外苅　体落　四高　（吉田孫二郎　鈴木琢磨）
四高　（米澤末吉　布村祥）

本袈裟（石川玄知　坪倉利）　背負投　四高（中村某　桑原益方）
拂腰　二中（金田仁三郎　志村猪藏）　分　二中（本原正生　椎原廣）

講道館柔道勝負法ノ形

大腰　拂腰　一中（齊田寅彦　肩車　津田弘）

講道館柔道古式ノ形

小外列　四高（福間勝吉　小西孝德）　巴投　二中（藤田研二　城谷隣賢）
分　跳腰　一中（八里喜久男　足拂　北村祐壽）　分　四高（水鳥政一　佐竹秀一）

（藤善先生　吉田宗一）

尙番外として來賓永岡先生は本校有級者の大將株を稽古せらる、神出鬼沒圓轉滑脫の妙術恰も神に入り、見るもの只茫然自失たるのみ、我國武德會本部の敎士として英名四海に名高き當時日本一流の業を有せる先生程有りて流石に本校の勇將も皆中天に飜り本日此の名譽ある摸範稽古を願ひ出でし勇士は左の如し

吉田宗一　吉川友信　高井魯一
佐竹秀一　城谷隣賢

高安會長は例の慈愛深き笑顏を浮べられて閉會の挨拶となり一同起立再拜して本日の會を圓滿に終へたり時に午後六時なり高安會長、石川部長、永岡先生、藤善先生、の親しく御臨場を賜はり委員諸君か熱誠に盡されて紀律正しく整然として閉會に至りたるとを感謝す（照陽記）

我か柔道部は尙設備充分ならず有級者等級表の備へなきを以て左に目下本校生徒有級者諸氏の姓名を列せん

柔道部有級者

（初段一級）吉田宗一　一級　吉川友信
二級　高井魯一　二級　佐竹秀一
三級　城谷隣賢　三級　小西孝德
三級　津田弘　三級　北村祐壽
四級　桑原益方　四級　淵原隆庵
四級　平松敏四郎　四級　松原廣
四級　林秀雄　四級　太田勘市
四級　鈴木琢磨　四級　上木隆基
四級　志村猪藏　四級　坪倉利
四級　石川玄知　四級　布村祥
四級　高田茂一　四級　瀧澤武藏
四級　平野鄕次郎　四級　橋本眞一
四級　須賀芳篤　四級　明石秀二郎
四級　江村研正　四級　重松威勝
四級　佐々木茂樹

○第三十八回十全會講話會

通常會記事

後苑の桐葉ハラ〳〵と落ちて蕭颯たる金風い茲に天下の秋を報じぬ峻嚴なる秋霜は木々の木の葉を黄金色に織りなし快き小春日和は黄菊白菊を思ひのまゝに薫らしめぬ我が講話部も去る十月二十日(土曜日)を以て神聖なる濟々堂場裡に時ならぬ花を咲かしぬ半千の健兒は辯士が半言半句も聞き洩らすまじと片唾をのんで控へたり

午後三時半「開會之辭」は上田部長によりて宣告せられ待ちにまちたりし談論の舞臺の幕は除かれぬ

先つ第一に現はれたる辯士は名も高き「カラア」も稱高き日の出の花役者、玉森法靈氏なり得意の「寫眞學」といふ題にて學者風に先づ其の學名より說き機械、撮影法よ及びたるに部長のなせる鈴の叫びは氏の匆卒たる逃足にあはして堂内に響けり

「奇病」なる語は專門家と問はず一般人士に喧傳せらるゝ今日此頃多幸なる哉今日この會は好箇の說明と大舞臺に患者供覽の大車輪の下に演ぜられぬ

先づ小原講師は「菅池地方奇病の病理及氷見郡奇病の剖見」(肉眼的標本について)の下に登壇せられ、一左上膊の前膊骨、二柱脊、三右側胸部の肋骨の一部につき一々病變を說示せられ奇病は「ラヒチス」か「オステオマラチー」ならんとて壇を下らるゝや次で

岡本京太郎君「菅池地方の奇病の踏査報告」として臨床上の点より述べんとて一、患者の數、實驗例二、發病時期の觀察三徑過四豫後に及び診斷として一、奇病の「ラヒテス」なること、二、奇病は成書に所謂骨軟化症に類似の点少なきこと、三、概して既發性のもの多かりし事の斷案を下して講話を終らるゝや

上田部長「奇病の原因調査」として血液、尿の檢査報告より說き始められ該地方には地勢の高き部に患者多きより見れは或は「バクテリエン」か「プロトツオエン」によるなきやとし終に今迄人の言ふ如く衣服食物等習慣上の事が原因に非ずして他に原因の潛在するらしとて降壇せらる

岡本京太郎君更に三人の該患者を供覽せしめて茲に奇病の幕は終を告げたり

佐々木教授冒し難き威嚴と溢るゝ計りの愛嬌を以て切り狂言として「洋行出産」を演ぜんとて壇上に現はれ給へり

「洋行出産」あゝ吾々の聞かんとするところはこれ

三峽星河影動搖窓外日春さて落陽茜さす一二線のみ

滿場の叫喚千衆の拍手耳を聾せん許りにて登壇を迎へたる聽衆は成田屋以上の大役者が述べ初めたる臺詞に濟々

堂蕭靜水を打ちたるが如し

見も知らぬ洋書、藥品は壇の傍らに一異彩を放ち登壇者の說明を促がす事櫛の齒をひくが如し

洒々たる辯一度口を衝いて出るや先づ親しく彼地に實見せる醫學社會の狀態を每會述ぶべしと約せられ

今日は「イースバーデン」に於ける獨逸內科學會の出演談を述ぶべしとて獨逸にれける醫學々會の現況より說き初め「オルト」博士の敎室にれける演說の稽古に及び轉じて旅行談より會の盛況となり圓轉滑脫奇稽諧謔殆んど送迎に遑なし双翼を皷して海山万里天空を翔けて身は何時しか彼地にあり或は研究室に或は瀛車の中にもしくは學會々場に隨伴し恍として樂しみを共にせしが如し學會場裡先生の演說（Experimentelle Untersuchungen über die Bedeutung der Extraktir stoffe des Freisches für die Magen Verdaung）につき說かれ最後に全四日間の演說中最も會員に滿足を與へたるは露西亞人と極東の我が輩なりきとて壇を下らる先生のユーモアの才にとめる講話に聞き惚れたる聽衆は狂せん許りに隨氣と感謝の喝采して暫しは會場も破れん許りなりき

上田部長立ちて閉會の辭を述べられ履聲靴聲轟々然として反響し去る場內疎影となりたるに趣味ありし今日の會の追想に耽りし我の忽然として醒むれる時は「八時」に垂んとし秋氣蕭殺人に迫り四顧暗瞻徐洒定し（我羊生）

○三年の級會

鯱丸

俳句子は「門前や杖でつくりし雪解川」と申し「袖ひじて結びし水のこほれるを春たつけふの風やとくらむ」と大和歌は優さしく候へど所詮は寒暖計が証明致すべくお互に氣も心も伸びやかに相成候

冬永き北國も、よろづは物の裏れもて、いつとしもなく温かになり候や、春戸の梅に蕾の見へ、椿の花の紅も笑い出し候へば、春告げの鳥も來鳴きて、風景物色、いさゝかとゝのゐ申候。

浮世の師走、相撲の回向院、いづれ愚かはなけれ共、書生には試驗と云ふ附き物ありて、邪魔な關所の門揃へなれど、通らにやならぬ御法度なれば、之も致方御座なく候。

その試驗も相濟み、さしもの雪も解け、めつきり春らしうなり候きさらぎ廿六日に、第三年の級會は本校にて催され候、然かし詳細の事は、今日此處に記す要なく、先はさら〳〵と御茶漬流に書き流し、筆の儉約紙の儉約、頭の儉約、萬事經費節減の餘勢で以て示しあげ候。

會場は、ヘマトキシリン、ピクリン酸の敎室なりしが、

半紙製の萬國々旗や、服部君の手になりし裝飾画によりて面目を一變したるは、山家の猿も衣裝からと申すべく、官費のストーブ烈火の如く紅熱せられ、御蔭にて全身溫まり候、四時を過ぐる十五分、周旋方の酒井君壇に登られ、エンフォチック、フレースづくめの演說有之候、たとへば熱き心！熱き暖爐！熱き熱心を以て云々の如し、思ふに意あつて言足らざる的か、然かし愛嬌ある演說なんめり、次に級長の演說あり、鉢の木の講釋につぎ悲觀的なるべからず、薄志弱行は大禁物の事、痩せ馬を耻づるなとの敎訓になり、其の后演壇さびれし所に、赤松君が現はれ出で、頻りにスプリングを繰り返したるは、勇氣ありて材料足らざるの致す所かと相見へ候、君は只 Spring を a natural fountain に附てのみ說かれたれど The water which issues from the earth, and its action and motion にては範圍せまく to leap, to pomud, activity 又は to start or rise suddenly from a coyert 位と景氣づけて后種々の場合に應用被遊候方宜敷やに存候、次に田中君は校風の競はぬを歎き、學生相互間にて忠告せば禍を未發に防ぎ得、從て學校の名譽を失ふやうなる事なしと申され候、それは臭氣止め、防腐劑、わるからぬ理はなく候、淵原君は强いばかりが武士では無い、情も武士の片われと、中々風流に出で、名づくんば「日本的漢詩」なる題に演ぜられ候が、惜しい事には君が引證せられしかの「越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今惟有鷓鴣飛」は例の李白が越中懷古の詩には候はずや、されば唐詩が君の所謂悲哀的なりとは直ちに判斷し難かる可く、かゝるヒストリカルエピックよりもリ、カルに傾ける詩は常に悲哀を含むで餘嫋綿々、吾等の心をチャームするものに候、明治初年の慷慨悲歌は全く隨唐大平の調を帶びざるは勿論に有之候、然かし茲に詩の價値を品評するは當らずと存候、とは申せ共史記、漢書、老孟其の他諸子百家は氣焰當るべからざる文章なるに、獨り詩のみ女性的にはあるまじく、之れプロースとバースとの別るゝ所に候らん、さわれ唐詩よりちよつと勇壯なるをぬき出し候へば、杜審言の贈蘇味道に曰く「北地寒應苦、南城戍不歸、邊聲亂羌笛、殺氣捲戎衣、雨雪關山暗、風霜草木稀、胡兵戰欲盡、漢卒尙重圍、雲淨妖聲落、秋高塞肥馬、據鞍雄釵動、搖筆羽書飛、興駕還京邑、朋遊淵帝畿、方期來敵凱、歌舞共春暉」の如きはその一例に有之、西詩にてもグレーの如きは尤も悲哀的に御座候、また俳句の儀ぢき種切れに相成るやう仰られ候へ共、人間思想のあらむ限りは先づ身代限りも致すまじく、詩を以て音聲の排列と論ぜられ候にはミューズとやらむの姫君は泣き申すべく候、へたの長談議早速切上げ、伊藤君

の西洋の御話を紹介仕る次第なれど日本語に燒き直してはあンまりはかなく。ペンニーブックにあり想に存ぜられ候、然かし君の事なる故西洋の本で御よみに成りし事承知出來候も、うつかりワシ位がやつては物になり不申、兎角舶來のことばは君に限りまをし候、その后は演者なかりし樣覺へ候が物覺へのわろき男に候へば、くわへ落しなしとも云はれず諸君諒察焉。

餘興の段と相成りますれば、いつも藝ある御方の御骨折ばかりにて、甚だ相すまぬわけ柄なれど、無藝大食のワシは、隊操の號令かける位が關の山なれば、ストーブの陰でおとなしく聞き居り候、扨て劒舞は關根君專賣、十三絃のコロリンシャンは中川さんと相場きまり、守部君や西君の琵琶うたありて、新谷君と中谷內君との尺八合奏、謠曲は藤崎君の松風、鷹津君の蟬丸、いづれもやんやと大當り、興行元は大喜悅なりしが、腹がへつては働けぬで晩餐分配、百人の口がばくつく間に再び餘興は始まり、先生のうたひやら某々子等の狂言やら、バイオリンやら、歌曲百出、しばしは歌舞の淨土に樂隱居せし心地致し候、終りて當日の苦心になれる福引あり、とり〴〵可笑き中に十人の撰手には賞品有之ろれにて散會仕り候。

歸途、月はれ空澄みて、殘雪匂ふ許り、松の隙漏る白銀の道蹈みて、僑居に急ぎ申候、目出度かしこ。

○醫學科第二年級々會記事

秋天高うして金風恣に疎林を動し、乾坤轉た寂寥たり。噫雲山萬里を離れて遠く笈を異苍に負ひ、常に飄逸を排して活躍を覓め、因循を棄てゝ向上を愛する措大輩、何爲ぞ沛然として幾多の感慨の胸裡に迸發せざるあらんや。此時に當り我第二年級は、丕に其情誼を溫めて團結を固めんが爲に、十月十四日を卜して、圓滿にして奇拔なる級會を兼六公園內の米永亭に開催して、豪快なる眞趣を味へり、抑も亭の位置たる、前は一帶の濠池を隔てゝ壘々たる城閣を眺め、後は老樹奇木蠶々として高く穹窿を摩して各其翠を競ひ、妙を矜る。傍に一條の瀑布あり、淙々として淸冽なる銀柱を垂れ、泡沫四散して、水は岩を嚙み、岩は水を搏ち、金波嘯きて銀浪舞ひ、一異彩を放てり。倘し夫れ、秋風颯如として喬木に天使の琴韻を奏せば、快感胸腔を壓して遙に俗塵を脫して、仙境に徜徉するが如し。又以て積日の鬱を一洗して、所謂浩然の氣を涵養するを得んか。

此日樓上に會する我黨の健兒、無慮百有餘名、快談高笑和氣洋々たり、午後六時開會の豫報あるや、小野澤君は

劈頭悠々として演檀に現れ、穩暢の風格を以て、圓滑なる雄辯を振ふて開會の辭を陳べ、且個人の見解として、能く國運に照し時弊に鑑みて、吾人同胞が協心戮力して我級の風紀を振肅し、團結を强固にせしめん事を切望する主旨を略叙して降檀せらるゝや、次で上田教授は、拍手喝采に迎へられて威風稜々登檀せられ、先づ級長としての責任、及び自己の經歷を前驅とし、更に犀利なる話頭を轉じて、廣く古今の道德の高臭を對象して、引例縱横、必ずしも現今の道德が世俗の絶叫するが如く腐敗の極度に達せざる所以を縷述して、吾人の前途に論及し、專ら慈愛と掬育とを基本として、太中至誠の向上的理想を鼓吹して、其純粹なる活源の精髓を闡明し、恒に其理性に訴へ、常識に照して、能く趣味の墮落を葬り、邪劣の僻見を斥け、精力を聚結して向上に立脚し、爰に胚胎する現實の精神を發揮すべしと、懇篤に諭說せらる、蓋し教授が滿腔の熱血を灑で、其衷心を披瀝し、以て余輩をして臭俗の暗潮に棹さゝざらしめんが爲め、主觀の小宇宙の中に客觀の大宇宙を縮寫し、更に之を吾曹に映射せしむる、迅速にして明晰、虎深谷に嘯きて、錚然として風起り、龍靑潭に怒つて、沛然として雲湧くに異ならず。其見解頗る公正にして、用意極めて周密、能く吾人の肺腑に侵轍して茫悚自失すると暫時、自ら謬見の動機を未發に豫防し、一點向上の曙光を求めて之を追究せざるを得ざらしむ、眞に感佩の至りに堪へざる也。

次で高安校長登檀せられ、温顏に笑波を湛へ、諧謔一番、先づ吾曹の頤を解かしめ、更に話趣を運動競技の方面に亘りて、身體の精神に及ぼす關係を標榜し、加ふるに本年當校運動撰手が各學校の秋季運動會に於て、嶄然頭角を露し、先頭の榮譽を占めたる實例を參照して、將來倍々演技の勃興を圖り、運動の發暢を企て、以て强實なる體格を養成して、須く其基礎を固め、根底を深うして將に一大新生面を開展せんとを期待すと論結せられ、其間能く幽雅の態度を描き、婉曲の眞趣を添へ、靉然として薰風の馨に醉ふの感あり、其一事を述る每に敏活にして圓熟、左右推究して必らず其潤底を極め、潮水灣に上りて浦淑皆滿るの狀あり敬服々々。

次で石川教授は、社會の風潮と時勢の推移とに鑑み、大に本能主義を主張して、人格の脩養幷に冒險的事業の効果奈何を說き、良心の審判して指定せる自家主觀の世界最高の標準として、徒らに他の顰に倣ふて其特性を沒却する無く、其自由なる思想を發揮して可なるべしとて吾人の注意を喚起せしめらる、而して徹頭徹尾、謙讓なる態度と慇懃なる聲調とを以て、講演せられたるの懿德は、吾人の殊に留伏すべき所なりき。

次で吉田君は、本校入學以降篤實に研鑽せられたる金澤方語を文法上より學理系統的に觀察して、加るに佐渡、大阪、名古屋の各地方に於ける方言を引證して興味津々たり最後に斷案を下して曰く「一般に金澤方言は、同行同列の變化夥しく、隨て恁る變化は、文法上の許容せる範圍に隷屬するを以て、之を使用して妥當なるべし」と吾人は斯る有益にして趣味ある研究に從事せらるゝを多謝すると同時に、將來愈々豐當なる材料を蒐集して、吾人の眼界を廣濶にせしめられん事を囑望す。再び小野澤君は、例の沈著なる容姿と、美妙なる音調とを以て、日露戰役に從軍して齎來せられたる滿州の異事珍談を愉快に講演せられ、諄々として說き來り說き去り、實況を眼前に髣髴たらしむ、其變幻の妙、出沒の巧なるは、恰も虛空に翱る鴻鵬の如く、闇夜を縫ふ閃光にさも似たり、嗚呼天寵の快男子曷ぞ其氣の朗かにして、其辯の爽かなることよ。

續て一包の茶菓子亘りて、餘興に移る間隙を瀰縫し、衆皆雍々熙々たるの時に當りて上田敎授が愛翫の蓄音機の奏あり、奏調或は詩吟あり、琵琶歌あり、越後獅子あり、萬歲あり、義太夫あり、笑ふが如く、悲しむが如く、訴ふるが如く、叫ぶが如く、時に精神の興奮を促し、時に心氣の沈鬱を催さしむ、眞に恍惚として、天地と融和し、冥合して、ニイチェの超人論、ワグナーの新樂園、トルストイの原始基督敎的生活、乃至ゴールド、イブセンの新生活が如何に神秘の風韻を具備せるかを疑はしむ。此時に當り、本間、小暮、小野澤諸君の詩吟あり、各嘹喨たる獨特の美音を弄して朗吟せらるゝ處、咳唾忽ち珠を爲して、雄放人を刺し、能く行雲を停め、梁塵を降すに足る、次で再び肉林の饗を以て空腹を肥せば、其道に名聲隆々たる坪田、江村両氏のバイオリンの合奏あり、調趨整齊として韻致縹渺、流暢にして委曲、優雅にして婉美、楚々として人を動かし、自ら骨鳴り肉躍る、其相伯仲する此を瀟洒なる仙人とすれば彼は夭嬌たる天女に似たり、彼を艶麗氣を慰むるの牡丹とすれば此は絢爛目を奪ふの紅葉に異ならず、終に小野澤君の得意なる手品あり、奇才縱横、細心巧緻、恰も老將の兵を用ゐる如く、其輕快なる手腕と、熟練なる籌策とは、以て君の圓滑なる心裡を讀破して、其俤を窺ふに庶幾からん乎。

既にして時正に亥刻に垂んとす、是に於て、衆皆起立して莊嚴に第二年級の萬歲を三唱し、充分の歡喜を盡して、各々歸途に就たり、斯くて最と名殘惜しき圓滿なる理想的の第壹次級會は、永劫に、無窮に、深夜の闇幕の裡に包まれ了んぬ。

○嗚呼關屋林之助氏

富貴は浮雲の如く榮枯は夢の如く、昨日は衰へ今日は榮ゆ、たゞ梢の花草の露の如し、されど芳名のみは天地のあらん限りは書にもかゝれ、人にも云ひ傳へられて實にめでたきものなり、當校卒業生の一人なる關屋林之介氏はその類になむ、

氏は石川縣鹿島郡崎山村の人、幼にして大志あり、夙に第四高等學校醫學部を卒業し、爾來研磧、或は病院に或は公職に盡瘁し、大に爲す所あらんとせしも一朝二竪のため、常とはに其姿を地上に消して白玉樓中の人となりぬ悲しい哉。

葬義は一月二十日鄕里崎山村に營まれ本校有志、石川縣第四部及び金澤病院職員有志より香奠として金若干を贈られたる由。

左に全氏の行を銘して氏の幽魂を吊ふ

履歷書

關屋林之助

原籍石川縣鹿島郡崎山村字三室七十五ノ七十三番地

關屋助右工門長男　明治七年十二月十一日生

明治二十六年九月十日　第四高等學校醫學部第一年級ヘ入學ス

全三十一年十一月十四日　第四高等學校醫學部醫學科ヲ卒業シ醫學得業士ノ稱號ヲ受ク

全　十二月五日　醫術開業免狀第一一五二六號下附セラル

全　十二月十五日　石川縣金澤病院醫員ヲ拜命ス（石川縣）

全三十二年九月十一日　石川縣金澤病院醫員願ニ依リ職ヲ解カル（石川縣）

全　東京帝國大學醫科大學國家醫學講習科ヘ入ル

全　九月二十七日　石川縣金澤病院醫員在職中職務格別勉勵ノ廉ニ付賞金五圓下賜（石川縣）

全　十二月廿八日　東京帝國大學醫科大學國家講習科ヲ修了ス

全　十二月三十日　神奈川縣檢疫官ヲ拜命ス手當金九拾圓（神奈川縣）

明治三十三年五月廿六日　天皇陛下　横須賀鎭守府軍艦千早號進水式御臨幸ノ際檢疫御用ヲ拜命ス

全　六月三日　東宮殿下　東宮妃殿下　葉山御用邸行啓及御滯在中檢疫御用ヲ拜命ス

全　六月七日　東宮殿下　東宮妃殿下ヨリ金參千疋御下賜相成リタリ

明治三十三年九月十四日　神奈川縣足柄下郡長ヨリ仝郡出張中銳意防疫從事ノ廉ニ付感謝狀ヲ贈ラル

全　九月十五日　神奈川縣足柄下郡小田原町長ヨリ仝町出張中誠意防疫盡瘁ノ廉ニ付感謝狀ヲ贈ラル

全　仝　神奈川縣足柄下郡小田原町有志者ヨリ銀杯壹個贈ラル

全　九月十九日　神奈川縣檢疫官願ニヨリテ免セラル

全　仝　東京帝國大學醫科大學撰科ヘ入學ス

全三十四年六月三十日　東京帝國大學醫科大學衛生學撰科ヲ修了ス

全　七月四日　東京市駒込病院臨時醫員ヲ命セラル

仝三十四年九月五日		東京市駒込病院臨時醫員願ニ依リ職ヲ解カル
仝　九月七日		石川縣警察醫ヲ拜命ス手當月五拾圓
仝　九月十二日		恩給顧門醫ヲ囑託セラル年手當六拾圓
仝　九月七日		檢疫委員ヲ命セラル
仝　十二月十六日		職務勉勵ニ付金九圓下賜
仝三十五年三月三十一日		事務ノ都合ニヨリ警察醫ヲ免ス
仝　四月一日		石川縣衛生巡視員ヲ命セラル月俸金五拾圓
仝　四月廿八日		年手當八拾四圓給與（恩給顧門醫）
仝　五月十九日		御用有之上京ヲ命セラル
仝三十六年十月二十日		檢疫委員ヲ命セラル
仝　十二月十八日		神奈川縣ヘ出張ヲ命セラル
仝　十二月廿八日		本年傳染病流行ノ際豫防救治ニ從事シタル爲メ手當金拾五圓給與セラル
仝三十七年三月二十五日		傳染病研究所ヘ入所ノ爲メ上京ヲ命セラル
仝　六月二十二日		第十五回傳染病研究所講習証書ヲ受ク
		金澤娼妓檢査醫並金澤娼妓病院醫員兼務ヲ命セラル月手當金五圓
仝　十二月十二日		本年傳染病流行ノ際豫防救治ニ從事シタル爲メ金拾五圓給與セラル
仝　十二月廿二日		本年赤痢病豫防救治ニ從事シタル爲メニ感染シタルニ付療治料金百四圓給助料金貳百圓給與セラル
仝　二月十三日		警察醫ヲ命セラル　出務日當金壹圓
仝　三月十七日		上京ヲ命セラル
仝　三月十一日		金澤病院醫員ヲ囑託セラル
仝　四月廿四日		石川縣第四部勤務ヲ命セラル
仝　四月二十五日		石川縣技手ニ任セラル　月俸一圓下賜
仝三十八年四月二十五日		第四部衛生係ヲ命セラル
仝　十二月十五日		赤痢病流行ノ際豫防救治ニ從事シタルニ付手當金拾五圓給與

（是より以下は生の記入するもの）

明治三十九年三月		金澤娼妓檢査醫兼金澤娼妓病院醫員依願職ヲ解カル
仝　四月		衛生巡視員　月手當五拾五圓
仝　九月		和歌山縣檢疫官拜命月手當八拾圓
四十年一月十六日		死亡

○高澤清松氏の訃

舊臘十二月、端なくも仝氏の訃は京都大學教授鈴木文太郎先生の下より金子先生の手を經て齎らせられたり、氏は富山縣出身にて、去三十一年第四高等學校醫學部を卒へられ、后、京都醫科大學外科學教室に研學中、年余ならずして鈴木先生に推薦せられ、伊豫住友鑛山醫員に在勤、今漸く順境に入りて得意滿々たる所、不幸チブス後の肺炎に冒され、前途有望なる形骸をこの世に止めて不歸の客となられぬ。嗚呼悲しい哉（十二月中旬）

○吊慰金

卒業生足立諒、丹羽直両君が發議にかゝる故福見助教授遺族に贈るべき吊慰金は此程両君より回送せられたるを以て、去日學生一同の分と共に同遺族に贈呈せり、遺族一同の恐悅は更なり、亡師の靈も草葉の陰よ

り冥悅せらるゝことならん、左に篤志家の芳名を掲げ、遺族に代り謹んで茲に諸君の厚情を謝す。

總金拾壹圓

寄贈者

丹羽　直君　　內海　友七君　　吉尾　開道君
平泉　泰雄君　　村本　淳吉君　　松久　祐馬君
七五三龜吉君　　渡邊　復介君　　正木　美澄君
青木市次郎君　　石坂直次郎君　　樋口　平治君
秋野　定吉君　　下條　正夫君　　青山　寬之君
林　龍門君　　酒井　利勝君　　秋山八百藏君
高桑勇次郎君　　神岡藤一郎君　　杉部多米吉君
村山常三郎君　　山口　榮君　　影山　清美君
足立　諒君　　米澤　知造君　　北川　光雄君
久我　龜吉君　　（雅名不順）

○下平教授の着報　舊臘十一月横濱港出帆、留學の途に上られたる仝教授には海上無事、めでたく着歐せられたる旨、此程宮田教授へ宛て通報ありたり。仝教授の宿所左の如し。

Prof. Dr. Shimodaira.
Pension Villa Frey.
Schwarzthorstrasse 71.
Bern, Schweiz.

○訂正　前號寄贈書目中護痘錦囊以下寄贈者鴨脚光榮君とあるは故土岐三折君遺書なる趣につき茲に訂正し併て編者の粗漏を謝す。

○左記の諸君より十全會へ宛て賀章を送られたり、茲に其厚意を謝す

大阪市歩兵第八聯隊第一中隊　　中谷　正範
石川縣鳳至郡中居村　　谷口　長松
函館區辨天町　　高松　多齋
歩兵第二十三聯隊附　　水上　俊之
福井縣吉田郡松岡　　中條　俊夫
大坂府泉北郡大津村　　八木　德太郎
越後國三島郡西越村　　高島　一二三
鳥取縣氣高郡日置村　　原田　正廣
在東京　　松浦　龜太郎
越後國西都城郡下早川村　　岡田　甚英
三重縣南牟婁郡神川村　　西　正胤
大坂府立難波病院　　須藤　庄太郎
清國安東縣右堂前街　　宮井　勇
新瀉縣西蒲原郡卷町　　吉川　砥直
能登珠洲郡東若山村　　勝股　享
在越中　　花岡　佐太郎
横濱市住吉町五ノ六　　兒島　亮吉

横須賀海軍病院	長井運齋	佐世保驅逐艦白露	大西瀨治
大坂市南區惠美須町二	上坂政太郎	岐阜縣大野郡高山町	永井環
栃木縣足尾銅山醫局	田代保二	大坂南區三本町七丁目	松波操
神戸市中山平區六丁目	山口辰五郎	富山市總曲輪六十六	城石健治
步兵第七聯隊第五中隊	笹田順二	能登七尾港	青木正枝
石川郡大野村字觀音堂	本田三郎	步兵第七聯隊第八中隊	杉本恒治
小松町大文字町七九	小掠正香	福井縣寶靈町	榊原久
石川郡上金石下本町	竹松衛	靜岡縣小笠郡横地村	吉村一馬
福岡醫科大學藥物學教室	溝口幾三	東京本鄕區西片町十	生沼曹六
步兵第卅七聯隊第六中隊	木谷義太郎	相摸國高座郡茅ヶ崎	杉山政長
福井縣足羽郡上文珠村	千葉玄也	福井縣丹生郡立待村	大橋豐
珠洲郡松波村	藤岡綱治	東京麻布步兵第三聯隊	吉田東秀
廣島步兵第十一聯隊	窪見一久	富山縣氷見郡	松井梅次郎
福井縣三國港平木十五	吉池省吾		中島正泰
金澤市味噌藏町下中町	越野義三郎	石川縣鹿島郡餘喜村	武田久米藏
高岡東病院	林京次郎	三河豐橋市關屋九十四番戶	渡孚貞
金澤市長町川岸	北川健三	步兵第四十六聯隊第九中隊一年志願兵	村尾純昌
三重縣河藝郡河曲村	片岡正	步兵第七聯隊第五中隊一年志願兵	來間隆次
沖繩縣那覇區字西	種子田秀吉	東京市本鄕區金助町二十七番地淸秀館	林正雄
横須賀海軍港務部	鈴木寬之助	富山縣西礪波郡若林村	喜多又太郎
石川縣羽咋郡高濱町	河崎有作	東京醫科大學病院田代外科醫局內	北川光雄
大坂市南區西新瓦屋町二	彥坂誠一	越前三國町今新十一	山碕芳太郎

石川縣鹿島郡高階郡西三階　野村亮吉
兵庫縣立神戸病院外科醫局　河野益躬
紀伊東牟婁郡三里村　中村弘齋
市立大坂衛生試驗所　北豐吉
陸軍二等軍醫　松村魁
陸軍三等軍醫　佐々木純一郎
同　山下鋲吾
近衛步兵第一聯隊醫務室見習醫官　坂木信一
廣島衛戍病院　吉田幡誠
福井縣鯖江町鯖江診療院內　輕部修一
福井縣三方郡八村　橘佐內
新潟市竹山病院　安田三木
富山縣東礪波郡庄下村　館昇榮
兵庫縣立神戸病院內　安積鼎
東京牛込區原町一丁目廿番地　蓮村外男
加賀小松町本大工町　太田他計作
長崎醫學專門學校教授　岡島敬治
兵庫縣立神戸病院醫局　深瀨信之
福知山步兵第二十聯隊陸軍三等軍醫　鈴木實
大坂北區安治川通南二丁目一四一　政山龍雄
越後西蒲原郡米納津村　草野佐一郎
福井市佐佳枝中町　木下克雄

大坂南區長堀橋筋二ノ四八　谷中正勝
長野縣小縣郡佐田村　中村惠
宮崎縣都城　平田一若
越中津澤　林良吉
在東京　森田齊次
北海道夕張郡登川村炭礦社宅廿五ノ一號　富田寛
大分縣南海部郡木主村　山田兎毛
東京第一術戍病院附二等軍醫　太田長作
越後北蒲原郡保田　渡邊十治
廣島縣双三郡八泊村　近藤琢磨
加賀國白峯　杉部多米吉
三河國西尾町西尾病院　福島可鋪
福井縣坂井郡鶉村佐野　中川喜平
廣島市田中町五十六　藤井榮次郎
在基隆　藤浪謙
薩摩加世田浦　平原雲新
陸軍二等軍醫　佐伯亮齊
在東京　清水末吉
越前國丹生　橘董
在紐育　松原三郎
福井縣坂井郡春江村　團田虎介
三重縣志摩郡片田　高崎二郎

關東陸軍倉庫　谷澤一郎
兵庫縣第四部　松王數男
遼陽陸軍病院　臼井順太郎
清國遼陽陸軍病院　永井學造
福井縣坂井郡三國町　高松岩吉
在東京　齋藤義雄
愛知醫學專門學校　久保武
韓國元山防備隊　中野才幸

（次第不順）

＊　＊　＊　＊　＊

梅が香や東風に送られ都より　藥三　白雨
梅一輪南の窓や風かほる　同
春雨は背戸の柳の二葉より　同
紫にかすむ麓や五重塔　同
握手せむ古郷の山の芽獨活哉　同

○

点々と柳は青し桃の里　藥一　宮島
畑打や菜種に烟むる山の色　同
美しう朝寢してけり藤の家　同
手打おく子を守る人の日永哉　同

＊　＊　＊　＊　＊

通信

○渡歐日記（下）

民賢にて　飯森生

十月九日古倫撲發、朝來快晴、風あれども船靜に、食欲進みて、心自ら爽なり、卓を圍て骨牌を弄し夜に至る、勝拯を擧げし頃皎々たる明月天空に懸り、銀波千里目を遮るものなし、

十日天候不穩にして晴雨定まらず、午後一時頃白雨一過、忽ち見る右舷を去る半哩、海水俄かに騷き立ち、水煙上騰天を衝き、怪雲低く蒼溟に降りて怒濤氾濫す、其狀蟄龍の天に登るごゞ如く所謂龍卷之なり、船員の語る所に據れば龍卷は印度洋の一名物にして是れを見る敢て稀ならずと

十一日、引續き雨天冷氣肌を徹す、午後驟雨屢々至り甲板に出つる能はず、船少しく動搖す不快なりしを以て沐浴後船房に入る

十二日雨治まり心地常に復す、十時頃大魚幾千となく

群をなし波を乘り越へ船と共に競進す其狀練兵を見るが如く無聊に倦みたる船客は吾も々々と立上り物珍しく打眺めたり

十三日快晴、秋風習々として面を拂ひ汗を見ず、飛魚の波間に躍ること數次、午前十時頃初て「ソコトラ」島を望む、船は稍陸に近きたるにや信天翁、燕なとの飛交ふを見る四五日來海上一物たに認めさりし折柄心自ら勇み「アーデン」着を待つ事切なり

十月十四日晴天、波靜にして海面鏡の如く氣候再ひ暑く風濕氣を帶ひ汗衣を濕す、午後一時島形を認め「アーデン」を去る四哩半の處に錠泊す

瀛笛の鳴るや否や黑奴は輕舟を馳せて羽毛、珊瑚、貝細工類を商ふ、時間の都合にて上陸の暇なく失望限なし、夕食后甲板を逍遙す折柄十四日の月崢儿たる「アーデン」の山を離れ、微風漣波を漂はし遙に市街の電燈星の如く燦き、興至りて夜の更くるを知らず

十五日船は愈々紅海に入る右に渺茫際涯なき「アラビヤ」の沙漠を眺め、左に斷崖屏風の如き「アフリカ」の連山を望み、一葉の輕舟鏡の如き海面を馳す、海鷗數百船を趁ふて飛び瀛船の往復するもの送迎の遑なし、海上所々に島嶼あり燈臺を設けて導となす

紅海は「アーデン」より「スエッ」運河に達する細長の海峽にして「アラビヤ」と「アフリカ」の間に介在し航路一千八百三海里狹き處は二哩に達せり遙に白砂赭山を望むべく砂漠より來る颶風は時々紅塵を卷て海面を覆ひ爲に紅色を呈す之れ紅海の名ある所以なり

夜に入り甲板に出つれは玉兎皎々として隈なく平原を照す九刃の鵬程を航して千里の沙漠に故山の月を見る感無慮『我妻も故郷で見む今日の月』

十六日天氣晴朗暑氣甚し終日遊戲に時を費す、夕陽水に傾く頃右舷に突兀たる山を見る之れ即ち「シナイ」山にして聖僧「モーゼ」が福の默契を得て聖書を記したる處、白雲麓を鎖して杳々影なし、夜に入り暑氣一層甚しく知らす々々甲板上に眠る十二時頃英人兩三名、口喧しく罵りあふ聲に目醒め驚て臥床に入る

十七日快晴なれども風涼しく心地よし已に談話に倦み無聊身の置き處なし、小說雜誌類を披き時の遷るを俟つ、此日二艘の瀛船に逢ひしも陸を見ず

十八日快晴、船は「バベルマレデーブ」海峽を過く、連峰漸く迫り海容次第に縮み午後二時半「スエッ」灣に入り港を去る半哩の處に停船す、暫時の後男女の檢疫醫來り船客を一室に集め一々姓名を呼ひ形式的の檢査をなす、黑奴の商人又々船を見舞ひて珊瑚煙草類を販賣す

「スエッ」市は運河の入口にして其左にあり人口二萬五

千、海に沿ふて一帶の町をなし瓊樓魏然として雲に聳ゆ、右は平沙千里人煙稀に裸山の起伏するを見る、船舶の運河に出入するもの頻々たり

午後六時より一時間六哩の徐行を以て船は運河に入る河幅漸く三四十間、深さ二十六呎、延長九十哩、大船は僅かに一艘を通ずべく両岸は渺漠たる平原にして堤を築き砂をせぐ、風雨ある毎に泥土河心を埋むを以て時々作業船往來して河底を浚渫す、浮標燈臺絶間なく立並ひ船の進行を便にす、途中二三の湖あり大船は此處にて交代出帆す

「スエヅ」運河の歴史を聞くに奈翁一世が埃及を征服せし時「ナイル」河に沿ふて地中海と紅海とを連結し軍用に充てむとし其志を果さず、降て今を去る四十年前佛人レセップ氏埃及王の協賛を得て歐洲列國の富豪を説き一の會社を組織し百難を排し十五年の星霜と一億七千萬圓の巨資を投して運河の業を大成せりと、目下通行の船舶は一噸には四圓の高税を支拂ふと雖も往年喜望峰を迂回せし時に比すれば石炭の消費量と時日の短小を計算せば尚運河を航行するの利ありと云ふ、今や其人なしと雖もポートサイド灣頭天の一方を睥睨せるレ氏の銅像は此偉蹟と共に長に朽ちざるべし

十月十九日起床、船は尚ほ運河中にあり両岸は時々駱駝の群をなして荷物を運搬するを見る右岸に一條の鉄路あり彼の三角塔（ピラミード）を以て有名なる海路に達すと、三十日餘漫々たる大海を航行せし身は大陸の風景目に新しく四方を觀望する内「メンザレ」の湖水に出つ水上鶴に似たる白鳥の幾億萬となく飛交ふ態は鏡の上に練兵を見るが如く頗る旅情を慰めたり

十九日間にして運河を航し了り午後一時「ポートサイド」に着す、久しく陸地を踏まざりし旅客は先を爭ひ上陸す、余等は當地の日本雜貨店に到り、はかき煙草なとを求め故郷への音信を認む、聞く店主は横濱にあること七年夫妻能く日本語を話し店員四名皆邦人なり海山萬里の異域にて日本語を聞き同胞に會せし時の感果して如何なりしぞ、夫れより店員西村某に導かれ市内を一巡せり

「ポートサイド」は埃及の東北端にあり、人口一萬餘を有する沙漠中の一市街にして、主として埃及、亞剌比亞、土耳古人、雜居し右は運河に通じ左は地中海に面する要港なり、海水高く地盤低き爲め左右に波堤を築きて海水の氾濫を防ぐ、市街の光景は美ならず、已婚婦人の目より以下黑巾を以て顔面を被ひ彷徨するなと面白く宏壯なる運河株式會社、レ氏の銅像等此地にあり

午後七時「ポートサイド」を拔錨し船は愈々地中海に入る、波荒く動搖甚し、翌日も天候不順時々劇雨あり、午

後に至り寒氣俄かに增し堪へ難きを以て冬服に改む「ポートサイド」は實に夏と冬との境界地なりき

二十一日、同しく降雨「ゲヌア」着も四五日の內に迫りたれば荷物運搬なとの手續を了し、午後船內の床屋に入る散髮料二麻克、甚た廉ならず夕刻より風雨なく波穩なり、

二十二日再ひ細雨霏々として降り涼氣肌に侵む、午后甲板上に出つれは右に伊太利の一角を望み左に雪を戴く「シ、リー」の諸山を見る、新藤氏歌て曰く『れとゝひのポードサイドは暑かりき今朝シ、リーに雪の降る見る』行く事一時間「エトナ」憤火山あり形富士山に似て山頂に煙を揚ぐ、進む事又一時愈々「メシナ」海峽に入る潮流激湍頗る急なり、右岸に「ポギー」市あり、左岸に「メシナ」市あり、其間僅に一哩餘、我馬關海峽に似て指顧の內にあり、海に沿ふて伊太利內地に通せる鐵道列車の黑煙を吐て馳驅するを見る是れ歐州大陸を見る始なり海峽を出づれば雨烈しく船亦動く『時雨るゝやメシナの山の狹間より』と新米の俳人唸る

午後一時頃左舷に當り孤立せる「ストロンボリー」火山を見る山麓には人家參差市をなし附近に怪岩奇石の吃立せるもの多く風光極めて絕佳なり噴火は間歇性に黑煙となりて現はれ數個の噴火口あるものゝ如く夜中は火光百哩の外に達し天然の好燈臺をなすと

午後七時「ヲアペル」に着す日既に暮れ方角を辨ぜずと雖も左舷に燦爛たる電燈星の如く對岸には有名なる「ウエズーフ」噴火山あり火口は丁字形をなし烟々天を焦す「ウエズーフ」は紀元前八十年始めて噴火し平時著しき害なしと雖も時々大爆發を來たし人畜を傷ふ事稀ならず今春「ヲアペル」市拾萬の人家を灰燼の中に葬りしも此の火山なりと云ふ

同夜は英國皇太子當地へ來遊ありしとて數十發の花火空中ゑ閃き余等が乘車到着を祝せるものゝ如く時にとりて一興なりき夜九時頃三四の美人を乘せたる短艇漕ぎ來り曲面白き奏樂につれ躍り廻りて船客の哀を乞ふ、人爭ふて銀貨を投ずれば巧みに洋傘を以て之れを受ける等また伊太利の一名物なり夜半人靜まりたる頃異臭紛々鼻をつく怪みてこれを質せば市內の下水深夜に乘じて港內に流出するなりと俄に鼻を摘まむもをかしかりき

翌朝早く起き出でゝ上陸す市街は五六層の煉瓦造りにて道路石をしき電車あり馬車あり頗る雜沓す人種は日本人に似て色白く髮黑く丈高からず美人多しされど伊國は國勢日に傾き淫風隆んにして道德地に落ち掏摸窃盗の類白晝大道を橫行しあらゆる罪惡は一として行はれざるなく歐州唯一の魔窟なりと云ふ現に余は艇會社の往復券に

て上陸せしにも係はらず再び歸航料を強談せしが如き驚くの外なし近藤博士は羅馬を見物せんとて此處にて上陸す

午後四時三十分拔錨波靜なり余等一行は明日「ゲヌア」にて上陸すべけれとて夕餉の食卓に種々の裝飾をなし離別の意を表し船客は皆杯を擧げて萬歳を稱へ余等の健康と前途とを祝せり

十月二十四日頻に雨降り寒氣甚し一時旅客を以て埋められたる甲板も今は人影を見ず午后三時半一日千秋の思をなして待ちたる「ゲヌア」に着せり

「ゲヌア」は伊國隨一の良港歐州の門戸にして港内廣からずと雖も水深く海岸は斷岩絶壁より成り右方に一帶の人家有り後に山を負ひ眺望頗る佳なり余等は直に棧橋を渡り荷車を雇ひて荷物を運び「ロンドンホテル」に投宿す夕刻食堂に入れば盛裝せる紳士淑女綺羅星の如く「ボーイ」は皆燕尾服を着して接待到らざるなし田舍の「ヒョット」出たる者豈一驚を喫せずして可ならんや早々にして食堂を出で市内に至れば瓊樓玉殿軒を並べ人馬織るが如し偶々珈琲店に入れば數百の男女椅子を並べ電燈燦爛目に眩ゆく音樂の音は耳を聾するが如し余等は初めて歐州文化の中に至りしことゝて左眄右顧只目のみキョロつかせしも可笑しかりき

十月廿五日午前三時停車場に至り民賢行二等切符（六十八フラン）を求め列車に入る室内に四人の伊國人あり互に言語了解せずと雖も手眞似を以て意志を交換し笑ひ興せしも愛嬌なりき、正午十二時「マイランド」にて伯林行の新藤、寺内の両氏に分かれ心細くも宮田氏と共に「ウエレナ」に至り列車を乘換へむとせしも、車掌は頻りに之を拒む、言語全く不通なるを以て其何故たるを知らず漸く一獨乙人の好意に依り特別列車のみ發車する事を解し突嗟の間に其手續を了し辛して乘車する事を得たり此騷の爲め豫定の晝食を欠き午後八時食堂列車の連結を俟て漸く一日の饑渴を醫したり

夢の中に「デッツェ」「ボーゼン」「インスブルク」「ムルナワ」を過き「シュワイツ」の國境にて稅官吏の檢査を受け午後十時半民賢着「ヒルレンブランド」の下宿に入りしは十一時頃なりき、此日を以て長途の旅行も恙なく終はりたればホット一息つきぬ

＊　＊　＊　＊　＊

此稿を終はるに臨み余は船内に於ける景況及旅行者の注意すべき二三の雜事を記すべし

横濱より「ゲヌア」迄の船賃は、船に依りて多少の差異あれとも一等六百圓、二等四百三十圓、三等二百六十圓なり乘船の申込は早き程よき場所を取り得べければ一ケ

月斗前に申込み手附(五十圓)を納むべし

船中の食物は中々贅澤にて「スパイゼカルテ」に依り自分の好む處は何品にても擇ぶ事を得、時間は朝六時コーヒ、八時朝食、十時スープとブロートシンケン、十二時晝食、四時にコーヒ、七時に夕食、九時に又コーヒと云ふ工合にて中々食ふ事に忙はし但し「ビール」は一杯十五文(ビーヤマーク)を買へば十二文)之は自腹たる事勿論たるべし

旅行中の費用は、上陸の時に要するのみなれば、百五十圓斗にて澤山なり船中屢々不良の徒ありて危險なれば多額の金員は豫め正金銀行より目的地へ發送して置くを可とす、然らざれば信用狀(クリジットパピール)となし隨意の所にて少々宛受取るもよし、航海中は英貨最も貴まるゝを以て銀行にて換算し置くべし少し位なれば船中にても両替する事を得、日本貨幣は香港にて通用す

郵便は船中に「ポスト」あり、着港毎に其地より發送す、獨乙船なれは無論獨乙の切手を用ひさるへからす之も又船内にて販賣す

船内に洗濯屋あり、洗濯料は襟十文、カフス十五文、シヤツ、ズボン下各二十五文、上衣一麻克ズボン七十五文、白短衣五十文、靴下十五文と云ふ割合なり。散髪屋は比較的高價にして髭剃五十文、頭洗五十文、頭刈一麻克なり

沐浴は海水なれとも無料にて日々入る事を得、浴場の前には表を掲けてあるから之に姓名と時間を記入するなり、併し旅客の多き時は早く記入せされは時間のなくなる事屢々あり

船中にて守るべき規則は一、酒は食堂にて、煙草は喫煙室にてのむべき事、二、大なる鞄は「ゲペックマイステル」に預くべき事、三、多額の金員は「ツアールマイステル」に預くべき事、四、船客は各自階級を守り妄りに他室ゑ行くへからず、五、夜具蒲團を甲板上に持出すべからず、六、非常の際は一に船長の指揮ゑ從ふ事等なり

船員は、船長、副長、會計長、荷物掛長「オーベルケルテル」「ケルテル」水夫等なり、船より分かるゝときには必ず酒代を置く慣習あり、荷物掛オーバー、食卓附、部屋附、湯殿附の「ケルテル」には各五六麻克宛、「コンツエルト」にも五麻克位寄附せざるへからず

旅行者税關を氣遣ふ者多しと雖も歐洲各國の税官吏は留學生に對しては、只形式的に檢閲するのみにして多小絹類などを有すと雖も商品に非らざる以上は課税するが如き事なし

是迄の渡歐者は隨分澤山荷物を提けたれとも、日本で調べたるものは不用に終はる事多ければ成べく少きを良

とす、先つ夏服、冬服、外套、靴、帽、傘（各一）ホワイトシヤツ（半ダース）襟（一ダース）靴下（半ダース）シヤツ及ズボン下（夏冬にて半ダース）ハンカチ（一ダース）單衣（二）綿入（二）合せ羽織（一）フランネル單衣（二）兵子帶（一）位にて而かも有合せのものにて充分なり餘は獨乙着の上流行に應じ調製するを可とす

書籍は無論本塲で新版を求むれば可なり只ドクトルエキザミンを受くる人には一通りの譯書を携帶する事を推奬す、勿論字引（和獨、獨和、獨羅）は留學生の生命と均しければ忘れさる樣注意すべし、船中の無聊を慰する爲めに小說、詩集、骨牌の類は存外必要なり

手廻のものは文具、櫛、齒磨、安全剃刀、小刀、鋏、扇子、ブラーシ、救急藥、武酒等なり船中にては今日も明日も洋食のみなれば魚類の鑵詰類、調法かられ、菓子中よては『かき山』最も妙なり一般に醬油氣あるもの口に適す、梅干、味噌漬など船暈の氣味ありて食欲なき時歡迎せらる

獨乙へ着したる後交際上或は學問上の事にて贈品を要する事屢々あり、獨人の喜ふ者は絹、漆器、刺繍、日本畫の類なり、されば蒔繪の卷煙草箱、刺繍ある絹手巾、木板日本畫帳の類最も適す絹地の山水花鳥なとは喜ふ事非常なれども額仕立になる樣寸法を撰ふべし　（完）

○民賢雜觀（三）

飯森生

▲言語の事に就ては前の通信にも一寸記して置いたが留學生の最も苦心するのは話である、殊に發音や「ベトーヌング」の差異で屢大なる間違を生じ或は意志を通する能はざる塲合が澤山ある、或大學教授は伯林へ行かんとして「ベルキー」に送られ或「ドクトル」受驗者は教授より「私には日本語が分りませぬから獨乙語でた答なさい」とやられた、まさか日本語で答をした譯てもあるまいに

▲日本人の最も難しとする所はLとrの區別である、元來日本にはLの如き固有の發音かないからた、之を各別に云へは六ヶ敷もないか談話中に屢反復して現れると自分は甘くやつて居るつむりでも對手には中々分らぬ、Berlin の間違も全く其發音と「ベトーヌング」の關係て大失敗をやつたのだ

▲一体西洋人は甚た悟りか惡い、伯林と云へは獨乙の主府だから一寸聞ても分りそうな者であるのに日本人の發音はソーー聞へぬと見ゐる、予か此間 Würzburg 行の切符を求むる時にも三四回斗言ひ直したけれとも分らない、仕方たく鉛筆て書いて漸く了解か出來た、而も其發賣口は Würzburg 及 Nürnberg 行のみの切符を賣る所てあつ

た

▲其他面倒なるは語の訛である、正しき言は「ハンノ―ベル」だと云ふ事ですが、處に據ては非常の訛かある、殊に田夫野人の如き無教育の奴と來たら何を言て居るか珍紛分らぬことが屢ある、今最も普通に行はるゝ訛を掲くれば nicht wahr（ヂットワー）nein（ナー。ヂー）Ich bin gekommen（イックビンクムマー）kann ich das haben（カーコーア）Laüs Bübi（ラウスビ―ブレ）Butterbrot（ベ―メ）Weinberg（ウエンケルト）Heimat（ヘマ―ト）lieblich（リアブリ）keines（ケンス）Prosit（プラウス）getan（ゲトカ―デ）gegessen（ゲカスセン）morgen（モルセン）heüte Abend（ハイント）wer（メア）ein（エ）das（ダト）dies（デト）Fleisch（フレッシュ）och, was（アワ―）heüte（ハイテ）kleines（クレヂス）等一々枚擧するに暇かない、或獨乙人か伯林に其叔父を訪問せし時食事の際叔父が eine güte（ヒュテ） gebratene（ヒーブラテヂ） Yans（ヤンス） hatte（ヒー） einen（ヒーヂー） grossen（ヒローセン） Wohlgeschmack（ヴオールヒシュマック） と云ふたか何の事か初には少しも分らなんだと云ふ話かある、其他大抵は er を英語の如くアに響かすから聞慣れぬ内は一寸とまごつく

▲尙必要なるは語の言ひ現し即ち Aüsdrück である、之は日本と稍異つて居るから互に意志の疏通か出來ぬ場合が澤山ある、多くの人は先つ頭て日本語を組立て獨乙語に「ユ―ベルセッツェン」して話すから對手には了解か出來ぬのである、畢竟獨乙固有の言ひ現はし方を澤山覺へるより他に良法はない、「アウスドリュック」の事に就き面白い話がある或留學生か一人の女に戀をした、併し剝き出しに夫れと云ふ譯にもゆかぬから種々苦心の末「魚心あれば水心」と云ふ句を思出し „Wenn Sie das Herz des Fischers haben, so habe ich aüch Sinn für das Wasser." と直譯体にやらかしたから少しも反應かなかつたと云ふ穿ちたる珍談がある、獨乙語を學ふ人は能く此等の諸點に注意をせねばならぬ

▲交通及地理上の關係により少しく教育ある獨乙人は英或は佛語を話す者が多い、「貴君は英佛の語をた話しなさいますか」と問はるゝ事が度々ある、殊に予の如き語の拙い者には「貴君の獨乙語は了解しませぬから英語でた話し致しましよ」と云ふ意味て問はるゝこともあるには閉口する

▲歐洲人には英、佛、獨、伊、露語は充分ではないが殆んと共通である、否少なくとも主要な名詞位は了解せらるゝが獨り東洋の語に至りては「万歳」の他毫も通せぬ、其源因たるや地理上の關係もあるか國に勢力なき一証にして「セメテハ」英語の五分の一位ても歐洲人をして日本語を學ぶの必要を感せしめたい者だ、今日の日本人は是

非豐太閤の意氣を遂行せねばならぬのである

▲獨乙人か花を愛するの慣習は甚た盛である、彼等は之を見ると同時に其香をも愛する、途上胸間に薔薇などを挿して居る者は少なくない、各「レストラン」の如きは夜に入れば花賣娘(時としては婆)が來る、粹人を以て自任する者は必す之を求めて愛婦に送る義務おある、甚しきは大學の敎場に於て學生の胸邊に之を見ることが屢ある、所謂蓮黨と稱するは是等の類なるべし

▲花の培養は多く人工にて四季の別なく何種の花にても求むる事が出來る、薔薇一輪三十文とは「レストラン」内の相場だ、夏季に入れば公園「アンラーグ」私人の庭園なとには種々の形に花を植て飾り附ける、縱令小兒でも之を手折るなと丶云ふ事は決してない、一般人民に公德心の發達して居るは感すべし

▲郊外には日本と違ひ誂いた樣に種々の愛らしき草花が野面を彩色して居る、千紫万紅とは實に此事だ、尤も牧蓍の盛な所丈けに「ウイゼ」が多いからだが、人目を喜はす爲め天のなせる苦心も一通りではない、花の種類や形狀などは多少日本と其趣を異にして居るか最も多きは Gensebluemchen, Dissel, Mohn, Ramillen, Veilchen, Nelken, Schlüsselblüm, Herbstzeitrose, Winden, Anemonen の類である、郊外散步に出た時は必す此等の花を摘て土産にする何んとしほらしき心ではないか

▲「ゲンセブルーム ヘン」(野菊の一種)は戀の辻占だとて „Ich liebe dich von Herzen, mit schmerzen, über alle Massen, ich kann nichit von dir lassen, ein klein wenig, gar nichit, ja, nein,……" と云ふ歌を謳ふて、一句每に一枚つ丶花瓣をちぎり最後の「ャ―」或は「ナイン」に因て戀の成立するや否やを占ふ戀愛黨が澤山ある

▲又獨人は最も能く犬を愛し一年十八麻克の犬稅を拂ふて之を飼養する、從て其種類も澤山ある、小牛の如き大なる者猫の如き小なるもの肥たるもの瘦せたるもの毛の長きもの足の短きもの一々枚擧するに暇かない、其種類に依て Spitz, Büldogge, Bernhardiner, Windhünde, Schäferhünde, Dakel, Püdel, Schosshündchen 等の名かある、人に危險を加ふる恐あるものには口繪(Maülkorb)を鉗てある、又嚴寒之候には着物をきせてある犬を澤山途上で見る

▲指環は流行品の一である、老若男女を撰はす比較的價高きものを澤山はめるのを以て名譽として居る、又結婚したる人は男女とも必す Ehering と稱する飾なき金製の指環を持て居る（裏面には結婚の年及配偶者の頭文字を彫刻す)、日本の留學生は既婚者でも此指環を持たぬから時々『戀の繪端書』にある樣な間違の生することもあると

云ふ

▲接吻は西洋の專賣物だ Küssen ist keine Sünde と云ふ諺があるから遠慮なくやつて居る、吾人の觀察に因れば之を愛の接吻と戀の接吻とに區別する事か出來る、甲は親子兄弟若しくは親しき間に用ひられ手背、頰、頸、額、目に接吻するものにして停車場に人を送迎する際には屢目擊し、乙は眞の「クッス」にして公園の「ベンチ」上や街頭蔭暗き邊に見るのである

▲散髮屋は市內に隨分澤山ある、Friseur と云ふ看板の下に眞鍮製の圓板をブラ下けてる（之は古代の石鹼皿にて日本の動靜脈の卷附た棒印と同一の譯だ）、散髮料七十文、髯剃四十文、頭洗二十文が普通の相場である、構造は日本と大同小異だが外から見透の出來る事はない、大抵は香水、齒磨、石鹼、「ユ―ベルチエル」の類を兼賣して居る、當地の慣習は眉毛や襟元を剃る事は毛頭ない、殊に奇妙なるは婦人が顏に剃刀を當てるのを嫌ふ爲に立派な髯を有する者は珍らしくない、日本人の口癖で時々 Bitte schneiden Sie mir meinen Kopf (Haar) とやらかして大に笑はるゝ滑稽談がある

▲西洋人の髯多きは何人も知る所十八才頃より皆ショボ〳〵と 双を蓄へて居る、上は王公貴人より下は乞食に至るまで一〻として髯を有せざる者はない、嘗て佐々木學士の通信にあつた如く敎室の小使でも立派な髯を持て居るから仕事服を着て居る時はドレガ敎授やら小使やら鑑別が出來ぬ、我々が小使に敬禮する奇談は珍らしくない

▲髯の形は今の獨乙皇帝か元祖でピンと上へ跳ねたのが近頃の「モ―デ」だ、所謂「カイゼル髯」とは即ち是れだ、此形を得んか爲めに燒ゴテや Schnürbartbinde, Bartwichse, Bartbürste, 懷中鏡などを不斷提帶して居る者が多い

▲頭髮は短き分けが多い、婦人の髮は油氣なく糾れ髮 (Locke) として無造作に眉際迄下けて居るのに男子は香油「コスメチック」なとで櫛目正しく Läusallee を造て居る、當地では「顏は其人の品性を現はす」と云ふ諺があるかられ化粧に浮身を窶すも無理とは云へぬ

▲浴場は公立の者と私立の者と二種ある、入浴料は一等一麻克二等七十文三等四十五文位だ、構造は無論一人宛で二等以下は「ブリキ」製の浴槽を用ふるか一等は陶器製「プラスタ」て一間、半間位な長方形の槽を構らへ灌水器 Brause, 檢溫器、鏡、石鹼、櫛、便器、痰壺、臥椅子、手拭なとの附屬品がある、溫度は四十度位で我々には低過きる、入浴時間は四十五分と限てある、其他れ好により光線浴、電氣浴、砂浴、冷浴なども出來る

▲一体獨乙人は沐浴の度が非常に少ない一ケ月一回か二

回しか入らぬらしい、其故か婦人などはプンと液臭の薫？を放つ者が多い、イヤ輕度の液臭は男子の好む所たと云ふて居る、体の清潔は主として巾拭法に因るらしい

▲獨乙の氣候は地圖で見ると北緯五十度位の處に在る、丁度日本の北海道位だから中々寒い、嚴寒の候は0氏零下十度迄も下り皮膚かピリ〳〵する程てある、酷暑と云つても二十五六度三十度とは上らない、室内に居れば綿入掛で差支がない、此夏フランネル襦袢と云ふ日は十日斗しかなかつた、だから夏服は皆裏が附て居て「セール」地などは大抵用へぬ程である、九月の末には早や煙突より煙が出て居る、日の長短は夏時には二時に東か白らみ夜の十時にまだ讀書が出來る、其代り冬期に入れば七時に夜が明けて三時半に点燈せねばならぬ位短い時がある

▲劇場は諸建築物中立派なるもの、一である、大抵の市には「ホーフテアター」とか「フォルフクステアター」とか云つて王室附の劇場や公立の劇場がある、其結構の壯麗なる目を眩する程だ、甲は主として貴族紳士、外國の貴賓など招待するに用ふるか我々でも金さへ拂へば入場する事が出來る併し「チリンデル」「フラック」と云ふ出立でなければ門前拂を喰ふ

▲劇場は大抵國費若しくは市費で設立せられ、日本でも東京に一つ位之に似寄た者があつてもよい、近來續々外國の貴賓が來遊せらるゝが天然の風光より他に目を樂しましむる者のないのは殘念だ、歐洲各國は一般に勤勉を奬勵すると同時に遊ふ所も澤山公設せられてある、「ニーツェ」の所謂「人間は苦む爲めに生れたるに非らず」と云ふ理屈から割出したのではあるまいか

▲「フォルクス、テアター」と云ふのは一般人民に割安て見せる劇場で何時ても滿員の姿だ、其他に種々の劇場が澤山あるが是等と雖設立の際は多少の補助位は出るそうだ、此點から云へば廻向院の角力場補助案などは敢て珍しき事ではない

▲劇場の構造は日本の者と似て居るが花道と云ふ者はない、舞臺 Bühne は一段高く中央に平坪 Paterre 側方に鶏 Rang がある、出鶏とも稱すべき Loge と云ふは五六人位はいり得べき特別の圍ひを有する所で身分ある人の占領する事に爲つて居る、一、二、三階は I, II, III Rang と云ひ最上層を Gallerie と云ふて一番安い場所だ、舞臺の直前の Parkett には樂師連が居る、場内には一々番號を附したる椅子を並へ喫煙、飲食は嚴禁せられて居る、大劇場は迚も「オペルグラス」を持たねば役者の顔が充分見えぬ

▲入場料は劇場の種類と場所に依りて高低かあるが一人八―一、五麻克、下等の劇場には立見する所かあつて五十

文位ても見れる、開場は午後八時はねが十一時に定て居る、少し有名な芝居があるときは朝の間に入場券を買て置かねば中々はいる事が出來ない、時としては二麻克の札が五麻克位に騰貴する事がある

▲劇の種類は Oper と Schauspiel である甲は日本の舊劇(寧ろ能に近き)にして音樂に連れて黄い樣なビリ〳〵の聲を出して歌ひ少し斗り所作事をするが初めの間は西洋人に謠を聞かしたと一般で少しも分らない、殊に詩的文句が多いから豫め筋書を讀て行かねば趣味が少ない、乙は壯士演劇の如く發音動作も明瞭活潑であるから初めから面白い

▲幕間は極めて短く五六分位しかない、其代りに「バウゼ」と稱し三十分位場内の「ガルテン」を散歩し得る休息時間か設けてある、中等以下の劇場には一定の場所で喫煙或は「ビール」などを呑む事か出來る、通常の「寄せ」などは丸て日本と變た事はない

▲音樂思想の發達した國丈けに樂師の多きには驚く、下等な寄席ても三十人位は合奏する、別に音頭を取る樂師長かあつて音律の間違はぬ樣に拍子を取つて居る、巴里の「グラン」劇場で見た「オペル」には音樂師か百人以上居た、詢にすばらしい者だ

▲役者は皆教育ある一かどの人物丈「ドクトル」の學位を有するものか多い、殊に「ホーフテアター」附の者は年俸何千麻克別に講座給の如く開場毎に數千麻克と云ふ給料を取る

▲役者は無論男女混合てある、從て觀覽者に感動を與ふる事も一層深い、近來日本にも男女混合論を稱道する者あるか是非ソーせなければ劇の進歩は得て望むべからすだ、自然と不自然は蓋し同日の論に非らず

▲道具立、書割など中々立派で、眞に迫つて居る背景などは精巧なる油畫を以てし、惜氣もなく種々の色彩を有する電光を應用するから目の醒める樣な心地かする

▲宗教の盛な事は今更予の喋々を待たないが何れの地方へ行ても鐘樓の高く雲表に聳へて居らぬ處はない、結構の壯麗、輪奐の美なるは大に建築學者の參考に値すべし、宗教は「プロテスタント」と「カトリック」の両派に分れて居るが甲は北、乙は南獨乙に根底を有して居る

▲新舊両派の軋轢の甚しき狀態は日本の宗教間の其れと同一てある、迷信は迷信を生し「クダラヌ」事に反目嫉視して居る、一部の人種間には結婚は云ふ迄もなく日常の交際上まで宗教の異同を稱へて居るから奇妙さ

▲葬禮は日本と同一である坊主も行けは親戚知友も合葬する、棺は花束で飾られ馬車で運搬せらる、埋葬前二十四時間は墓地内の屍體觀覽場に全身を花を以て覆ひ顔の

みを現はし知人に此世の暇乞の出來る樣に陳列してある便法とは云へ餘り心持のよい者ではない

▲墓標の工合などは各國一般であるか文明國丈けに中々立派だ、中には生前の面影を殘す爲めに大理石像や銅像なども澤山ある、毎日曜日には「フリードホーフ」が中々繁昌する、當地では大抵土葬のみである

▲墓の話まで出たら予の見聞錄も大抵終局を告げたらしい、拙の長談議は餘り感心せぬから一先擱筆し次には何かモット有益な所を伺ひましよう　（完）

九月二十三日　民賢にて

（森島、八田両氏宛）

○飯森益太郎氏消息

（三十九年十二月一日發信、八田氏宛）

拜啓十月十六日御差出しの芳墨只今落手兄の所謂大々的の御通信繰返し〳〵面白く拜見致候、之と同時に十全會雜誌も到着致候、小川學士との共述は近來の好著日本婦人に於ける月經初潮に對し文獻上の好材料を與へられたる事は斯道の爲め吾人等の深く謝する處に有之候、望むらくは尙「月經持續の年月」及び「月經閉鎖期」等の御調査有之候樣願はしく存候

岡本京氏の奇病調査報告說き得て甚た妙、而も Rachitis の斷案を下したるの勇氣は大に賞すべく二三の博士等が骨軟化症を混有せりなど一條の通け路を設くる者に比すれば百尺竿頭一歩を進めたるものと可申候、其他高安、松浦、岩砂の諸氏の報告又再讀の價値あり、錦上花を添へたるの感を懷き申候、雜誌界に於ける中央集權の餘弊ある今日北陸の一隅より這般の大論文續出せしは近頃快心の至りに候

當地には近來留學生續々增加致し今や三十名の多きに達し前代未聞の盛況に有之候、留學生の出身地は主として東京岡山九州方面の人多く北陸地方の人士少なきは聊か殘念に存居候處廿日前我校出身の橋本監次郎氏來着小生の鼻頭も少しく高きを加へ申候、兎に角歐洲醫海の新潮に浴するも亦人生の一快事に候間金ある人はドシ〳〵渡歐有之候樣願はしく存候

十一月三日の天長節には留學生間に一大祝賀會を開くべく余等「モッアルト」連其委員に撰はれ國旗の製造や日本料理の獻立に忙しき折柄、當地の日本名譽領事 Schüssel 氏より　天皇陛下の誕辰を祝し度に付拙宅迄來臨の榮を賜はりたしとの招待狀を受け候爲め我々の宴會を中止し同日午後七時「チリンデル、ゲーロック」と云ふ○珍的出立に

て參り候處、我留學生の他十一名の紳士淑女有之食卓には國旗、菊花其他美麗なる日本的裝飾あり、料理は Modürtle-Süppe, Seeforellen, Kalbsrücken mit Gemüsen, Dünstobst, Fasanen mit Kraüt, Hefrorenes, Käse, Obst und Backwerk 等順々に配置せられ、「シャンパン」の行渡りたる頃領事は日本語を以て　大日本皇帝陛下の天長節を祝する旨演述し万歳を三唱し次て三浦新七と云ふ人謝辭を述べ領事の爲め杯を擧けて健康を祝し申候、領事の令閨令娘又席に在りて周旋至らざるなく宴は十一時頃終り申候、餘興として例の「タンツ」は始まれり盛裝せる紳士淑女は音樂に連れ蝶の如く踊る樣の面白く留學生中のハイカラ黨我劣らじと飛出し相手撰はす跳ね廻りしも一興なりき、領事の懇望により君か代の合唱、吉田某氏の劍舞(鞭聲蕭々、捨兒)等一座の喝采を博し歸途に就きしは十二時頃に御座候

當地の氣候は昨年に比し大に温く今日迄好天氣打續き候處、天帝も十二月一日と云ふに心附き本日初めて雪を降し申候、今日此頃は數十万と限なき「ショルンスタイン」より吐出す煙は曚々として空を鎖し天日爲めに光なく不快云ふべからず候、去れは戸外運動は一變して室内の運動と化しタンツの時期と相成候、御承知の如く當地にては上は王公貴人より下は日稼下女に至るまで踊を以て冬期唯一の樂となし其盛なる事は豫想の出來ざる位に御座候市内には四、五の「タンツ、インスチチュート」有之十二、一、二の三ヶ月を一學期とし「クルズス」を開き申候、授業料一人三十麻克、一週三、四時宛の授業し、三週目には適當の男女を配合して數十組合を組織し各劇場や會堂に開かるゝ「タンツ」に出席せしめ踊を練習せしむる事に御座候、尤も此社會の風習として「タンツザール」に出席する場合には必す自分の相棒たる「フロイライン」の送迎を爲すは勿論會場にて他の「フロイライン」と踊りたる際は必す一麻克斗の花を送る諚にて一夕五番の「タンツ」を踊れば忽ち五麻克を要すべく其他「ビール」や葡萄酒などは自然飲まざるべからざる仕組に相成居候故中々金の要る仕事に有之候、「タンツ」の種類は Walzer, Polka, Mazurka, Galopp, Schottisch, Reinländer, Menüet なとにて、此頃の大學生は本職を二段とし其練習に熱中し居申候

此五、六日前より小指の「パナリチューム」に罹り運筆自由ならず御推讀被下度候

靈光四射歳開天　此是神州第一巔
八朶玲瓏富峰雪　東京城裡照佳筵　吟雨
東天曙色仰芙蓉　八面玲瓏千仞峰
眞個神州雄鎭矣　依然萬古太平容　吟雨

會告

○寄贈及交換書目

（三月廿六日迄領收ノ分）

産科婦雜誌　八四、五、六、七、	日本産科婦協會
醫海時報　六五一、二、三、四、五、六、七、八、九、六〇、一、二、三、四、五、六、	仝
日本醫事週報　一、二、三、四、五、六、七、八、九、二〇、六、三、四、五、六、七、	仝　社
研瑤會雜誌　七五、六、	長崎醫學專門學校同會
日本助産婦新報　一〇六、七、八、	仝　發行所
臨牀彙講　六、七、八、九、	醫學書院
中外醫事新報　六四一、二、三、四、五、六、七、	仝　社
藥石新報　五九一、二、三、四、五、六、七、八、九、六〇〇、一、七、八、九、五〇〇、一、二、三、	仝　社
東京醫事新誌　一四九〇、一、二、三、四、五、六、	仝　局
順天堂醫事研究會雜誌　四〇七、八、九、一〇、	仝　會
成醫會月報　二九七、八、九、三〇〇、	仝　會
中央婦人科雜誌三ノ四、	仝　學會
醫事新聞　七三三、四、五、六、七、八、九、	仝　社
台灣醫學會雜誌　四八、五〇二、	仝　會
神經學雜誌　五ノ九、一〇、	日本神經學會
好生館醫事研究會雜誌　一三ノ六、一四ノ一、二、	仝　會
軍醫學會雜誌　一五七、八、九、	陸軍々醫學會
東京醫學會雜誌　二〇ノ二、三、四、二一ノ一、二、三、四、	仝　會
躬行會叢誌　三〇一、	仝　會
校友會雜誌　三七、八、	千葉醫學專門學校同會
臨床藥石新報　一九、二〇、一、二、	藥石新報社
助産之栞　二七、八、九、三〇、	緒方助産婦學會
日本眼科學會雜誌　一〇ノ一、二、二ノ一、二、	仝　會
藥學雜誌　二九八、九、三〇〇、	日本藥學會
國家醫學會雜誌　二三六、七、八、九、	仝　會
鎮西醫報　一〇二、三、	仝　社
莊內學學會々報　五〇二、	仝　會
治療新報　五七、八、九、	仝　社
藝備醫事　二七、八、九、	藝備醫學會
廣島衛生醫事月報　九六、七、八、	仝　社
北辰會雜誌　四六、	第四高等學校仝會
大日本耳鼻咽喉科會々報　二ノ五、六	仝　會
大日本私立衛生會雜誌　一八三、四、五、	仝　會
中央醫學會雜誌　七一二、	仝　會
醫學中央雜誌　四七、八、	仝　社
岡山醫學會雜誌　二〇三、四、五、	仝　會
治療藥報　一八、九、二〇、	仝　社
北越醫學會々報　六、七、	仝　會

日本婦人科學會雜誌　五、
日本消化機病學會雜誌　五ノ四、五、
東北醫學會々報　四三、
校友會雜誌　二九、
皮膚科及泌尿器科雜誌　六ノ五、六、
衛生談話　七ノ一、二、
靜岡縣醫學會々報　一七、
北海醫報　六ノ四、
京都醫學雜誌　四ノ一、
校友會誌　三、
若越醫談　五、
衛生新報　六七、
校友會雜誌　九、
校友會雜誌　四三、
學友會雜誌　一七、
東亞　一〇二、三、四、
成醫會月報　二九九、三〇〇、
眼科臨床醫報　一四
台灣ニ於ケル地方性赤痢ノ病原ニ就テ　一冊　中川幸庵君
台灣痢ノ一二統計的看察ニ就テ　一冊　仝　上
鯢魚ノ聽器解剖ニ就テ　一冊　岡島敬治君

仝　會
仝　會
仙臺醫學專門學校會
同
三重縣立第一中學校會
同
日本皮膚科學會
日本通俗衛生會
仝　會
北辰病院研究會
仝　會
石川縣立第四中學校會
同
仝　學　會
仝　會
岡山醫學專門學校會
同
東京開成中學校會
同
石川縣師範學校會
同
老川茂信君
小出貞次郎君
桑原勇七郎君

日本家庭百科事彙　一部一冊　雜誌部
神經病診斷及治療學　一部一冊　佐々木教授獨乙留學紀念トシテ三木三郎君外六十四名ヨリ寄贈
醫用電氣學綱要　一部一冊　仝　上
胃病新治療編　一部一冊　仝　上
新藥主治類纂　一部一冊　仝　上

自卅九年十一月十九日至四十年三月十六日 校外十全會費納付調書

金額	期限	氏名
金參圓	(自三十八年度至四十年度三ケ年分)	都築熊藏君
金參圓	(自三十九年度至四十三年度五ケ年分)	春田久太郎君
金參圓	(自三十九年度至四十三年度五ケ年分)	金子太須計君
金參圓	(自三十九年度至四十三年度五ケ年分)	渡邊九壽松君
金參圓	(自三十九年度至四十三年度五ケ年分)	八田智證君
金壹圓	(三十九年度一ケ年分)	太田他計作君
金壹圓	(三十九年度一ケ年分)	德木千秋君
金貳圓	(自三十七年度至三十八年度二ケ年分)	津川恒君
金貳圓	(自三十七年度至三十八年度二ケ年分)	杉原幹男君
金參圓	(自三十八年度至四十年度三ケ年分)	井口正察君
金壹圓	(三十八年度一ケ年分)	加納景成君
金四圓	(自三十五年度至三十八年度四ケ年分)	藏尙太郎君
金五圓	(自三十五年度至三十九年度五ケ年分)	藤井亥之吉君

金貳圓（自三十八年度至三十九年度二ケ年分）村田太二郎君
金貳圓（自三十八年度至三十九年度二ケ年分）勝木直吉君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ケ年分）高田文齊君
金參圓（自三十七年度至三十九年度三ケ年分）武田久米藏君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）片岡正君
金五圓（自三十七年度至四十三年度七ケ年分）沖野彌一郎君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）尾倉一英君
金四圓（自三十七年度至四十年度四ケ年分）近郷重孝君
金參圓（自三十五年度至三十七年度三ケ年分）松田龜太郎君
金貳圓（自三十八年度至三十七年度二ケ年分）三木三郎君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）百谷義一君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）加藤慶三君
金參圓（自四十年度至四十四年度五ケ年分）稲坂清八君
金參圓（自三十八年度至四十年度三ケ年分）野村亮吉君
金壹圓（三十五年度一ケ年分）眞柄佐一郎君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）井原悟君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）武曾三郎君
金參圓（自三十五年度至三十七年度三ケ年分）神谷貞次郎君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）清水秀夫君
金六圓（自三十五年度至四十年度六ケ年分）松浦啓三君
金參圓（自三十八年度四十年度三ケ年分）丸山六郎君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）齊藤義雄君

金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）橘董君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）藤岡勝治君
金貳圓（自三十八年度至三十九年度二ケ年分）增田貞吉君
金貳圓（自三十七年度至三十八年度二ケ年分）山碕芳太郎君
金五圓（自三十七年度至四十三年度七ケ年分）竹多乙三郎君
金參圓（自三十七年度至三十九年度三ケ年分）駒井定哉君
金壹圓（三十八年分一ケ年分）吉住保君
金參圓（自三十七年度至三十九年度三ケ年分）國分金城君
金四圓（自三十八年度至四十三年度六ケ年分）渡邊順吉郎君
金壹圓（三十八年度一ケ年分）松村魁君
金五圓（自三十七年度至四十三年度七ケ年分）神坂勇治君
金七圓（自三十五年度至四十三年度九ケ年分）堀米次郎君
金八圓（自三十四年度至四十三年度十ケ年分）澤田定信君

以上

醫學博士 緒方正清先生主幹

緒方婦人科學紀要

緒方博士主幹ノ下ニ發行セラレタル中央婦人科學雜誌ハ學術ノ進歩ト共ニ緒方婦人科學紀要ト改題シ内外學術ノ事蹟ヲ網羅シ一卷ニシテ能ク幾多ノ内外諸雜誌ヲ盡セルノ便益アリ實ニ婦人科醫ハ勿論一般實地醫家ノ寶典ナリ

從來ノ中央婦人科學會々員ハ會友トシテ本社ヨリ直接頒送シ又新ニ會友タラント望マル、諸君ハ直ニ本社ニ申込マルベシ

第一卷目次　頁五百余○寫眞四十余箇○模型精畫拾余個○レントゲン寫眞○顯微鏡彩色畫數個

○富山縣氷見郡及其附近ニ於テ殆ンド地方病性ニ存在セル一種ノ骨骼疾患ニ就テ○該病發見ノ由來○研究ノ顚末○疾病ノ所在及統計○該病ノ症候論○該病ノ經過○該病ノ轉歸○該病ノ本態○該病ノ氷見郡及其ノ附近ニ於テ地方病性ニ蔓延スルコトノ原因論○該病ノ豫防法○該病ノ治療法

毎年一回發行
菊版五百頁以上
密圖及寫眞畫夥多挿入
會友ニ限リ壹圓八拾錢
一冊賣價金貳圓五拾錢

發賣所

大坂東區今橋三丁目　中央婦人科學會

東京市日本橋區通三丁目
大坂市東區博勞町四丁目　丸善株式會社

專門大家八十餘名分擔執筆　醫學博士　醫學士

醫學大辭書

●第壹冊●第貳冊●製本既成

第二回豫約募集

本書の執筆者

朝倉病院長 醫學博士 朝倉文三君
東京醫科大學教授 醫學博士 入澤達吉君
東京醫科大學教授 醫學博士 大澤謙二君
醫術開業試驗附屬病院內科副醫長 醫學博士 岡田榮吉君
岡村病院長 醫學博士 岡村龍彥君
東京醫科大學教授 醫學博士 河本重次郎君
東京醫科大學教授 醫學博士 片山國嘉君
東京醫科大學教授 醫學博士 吳秀三君
東京醫科大學教授 醫學博士 佐藤三吉君
東京醫科大學教授 醫學博士 瀨川昌耆君
東京醫科大學教授 醫學博士 田代義德君
東京醫科大學教授 醫學博士 遠山椿吉君
東京醫科大學教授 醫學博士 土肥慶藏君
京都醫科大學教授 醫學博士 藤浪鑑君
東京醫科大學教授 醫學博士 三宅秀君
東京醫科大學教授 醫學博士 三輪信太郎君
東京醫科大學教授 醫學博士 山極勝三郎君
東京醫科大學教授 醫學博士 橫手千代之助君
京都醫科大學教授 醫學博士 和辻春次君

外ニ醫學士五十五名ドクトル其他六名分擔執筆

本辭書の包含するところは、醫學のあらゆる分科に渉り、各現代諸大家が責任を帶び、署名して筆を執られたるものゝ學科目は左の如し、

內容科目

●解剖學　●組織學　●生理學　●醫化學　●病理學
○病理解剖學　○藥物學　○毒物學　○診斷學　○(內科學)傳染病學
●呼吸器病學　●循環病學　●血液病學　●消化器病學　●神經病學
○新陳代謝病學　○(外科學)繃帶學　○眼科學　○產科婦人科學　○小兒科學
●耳鼻咽喉科學　●皮膚病學　●梅毒學　●泌尿生殖病學　●精神病學
○衞生學　○細菌學　○法醫學　○齒科學　○醫史學
●軍陣醫學　●一般治療學　●看護法　●衞生行政學　●其他

電話本局特番　壹五三九　東京神田
同文館
振替貯金口座　第壹參五番　表神保町

後二

醫學博士
醫學士

專門大家八十餘名分擔執筆

醫學大辭書

說明の適切

術語の正確に伴なひて、說明の詳細適切、而もまたその要領を盡したるは、洵に本辭書の特色として誇るに足るものあり。學理と實際との兩方面に涉りて、一たび本辭書を繙かんか、坐ながら大家名流の所說を聽くの感あるべく、多年難解の疑問は釋然として知了し得らるべきを信ず。

本書の必要

右の如くにして成らむとする「醫學大辭書」は實に本邦醫學界空前の大著書にして、六號活字にて大版三千餘頁、收むる所の語數約壹万六千以上に及ぶ。醫學界最新の學理と技術とは、燦然としてこの一書に見らるべく、さながら一の完全なる醫科大學を座右に建設したるの觀あるべし。されば一般の醫師、藥劑師、學生、衛生官吏が日夕師友として一本を手邊に備ふべきは言ふまでもなく、病院、學校、會社、圖書室、診察室等に向つては、實益裝飾、二つながら兼ね備へたる一大寶典なり。

定價金貳拾七圓（洋裝全六冊）壹冊定價金四圓五拾錢

豫約方法

壹回拂 金拾九圓 申込書と同時に拂込み相成れば着金と同時に第一、二、三冊送本す以下隔月發送）

五回拂 金貳拾貳圓 申込書と同時金八圓（外に小包料）を拂込み二、四、六、八月の各末日に本書引換に金參圓五拾錢宛）

郵稅 九十錢（市內金三十錢）臺清韓國二十錢代金引換十錢增 豫約申込者は上記の小包料前納の事

出來期限 第壹 第貳 既成以下隔月發行四十年八月完成

豫約期限 四十年貳月二十日限

內容見本 ●本書の見本は御申込次第無代進呈● 郵券四錢封入申込の方には大冊見本送る

京東神田 同文館 表神保町 大賣捌所 全國各書籍店

紀念號發行之豫告

廣島衛生醫事月報は明治三十二年一月を以て呱々の聲を發し爾來年を閲すること七年有餘幸に諸士の完全なる保育に由て健康の成長を爲し來る四月は第一百號の一大紀念號を發行して平素の眷顧に報ひんと欲す希くは醫事衛生に關する論說實驗詩歌俳句其他祝祠祝電等を問はす陸續御投惠を賜はらん事を切望す

但〻切期限は三月末日迄とす

廣島市猫屋町百〇六番屋敷

廣島衛生醫事月報社

大日本耳鼻咽喉科學會總會

本會總會來四月五日金曜東京醫科大學構內ニ於テ開會致候間御演說希望ノ方ハ三月十五日迄ニ大日本耳鼻咽喉科會事務東京大學耳鼻咽喉科醫局ニ御一報被下度候也

宿題　聾啞ノ源因、病理、療法

明治四十年二月

大日本耳鼻咽喉科學會

○第七回日本皮膚科學會總會

本會第七回總會ノ儀來ル三月卅日(土曜)卅一日(日曜)ノ両日(期日豫定)名古屋市ニ於テ開會致候間御演說御希望ノ方ハ三月十日迄ニ本會事務所ヘ御一報被下度候

宿題　(一)小兒濕疹原因及療法　(二)黴毒ノ原因及療法　(三)婦人ノ淋性疾患

備考

一今回モ前回ト同ジク特ニ宿題報告者ヲ選定セズ當日ノ演說ハ可相成ハ右宿題範圍內ニ於テ諸君ノ實驗例、治療法、統計的文史的研究、病理等ニ就キ御報告ヲ得タキ事

二右ノ範圍外ニ於ケル演題ニテモ時間ノ許ス限リハ差支無之事

三成ルタケ患者及標本ノデモンストラチオンヲ多ク致度事

四演題、三月十日迄ニ御申込ノ分ハ總會次第書ニ掲載致スベキ事

明治四十年二月

日本皮膚科學會

生徒募集

◉體操學校高等本科生六拾名募集（一月十六日官報ニ詳細廣告アリ）規則書從前ノ通リ

◉入學願書三月十日限本校ニ提出

◉入學試驗三月二十日午前九時施行

東京府荏原郡大井村(品川海岸)

日本體育會

月刊 産科婦雜誌

購賣希望者は日本産科婦協會會員となり一ヶ年分會費前金壹圓を納入せらるゝ時は毎月配本すべし

本誌創刊以來茲に八年時勢の趨向に鑑み一大刷新を加へて世に見にんとす産科婦雜誌中實際問題に對し指導者たり顧問たり得るもの本誌を措きて他に求むべからす二段十八行の植字は自ら内容の豐富を語り時論、原著及實驗、家庭衛生、の諸欄盡く讀むべし殊に時論及講義に至ては窃に本誌の特色として江湖に誇る所敢て大方の一讀を待つ(講義)は正科として産科婦學(産婆學)及び看護學を連載し遠隔の地に在る人尚高等産科婦養成所の講筵に參するの思ひあらしむことに試驗準備の諸姉に對ては無二の良師友と謂ふも强ち誇大にも非ざるべしと信ず。

發行所　日本産科婦協會

東京市日本橋區濱町三丁目七番地
産科婦人科楠田病院内

電話浪花一六〇番

會員ヲ募集ス

○規則摘要

一、本會ハ神經系統及精神ノ生理及病理的講究ヲ目的トス

一、本會會員ハ本會ノ目的ヲ翼賛スル醫士及其他ノ特志者トス

一、集會ハ毎年一回四月ニ之ヲ開ク

一、本會ハ毎月一回雜誌ヲ發行シ之ヲ神經學雜誌ト稱シ無料ニテ會員ニ配布ス

一、入會セントスル者ハ姓名、族籍、職業、及現住所ヲ詳記シテ事務所ヘ申込ムベシ

一、本會ハ毎年四月ヨリ翌年三月ニ至ル十二ケ月間ヲ以テ會務處理ノ一年度ト定ム

一、會員ハ會費トシテ一ケ年金貳圓五拾錢ヲ前納スベシ

○雜誌內容　本會雜誌ハ獨リ醫學ノ圈內ニ止ラズ心理學、教育病理學、人類學、社會學、動物學等ニ於テ神經及ビ精神ニ關係アルコトヲ悉ク網羅シ趣味最モ深ク內容最モ多ク且ツ毎年我國ニ於ケル神經學ニ關スル論文及演說等ヲ悉ク網羅シテ神經學年報ヲ編纂シ既ニ其第五十回ヲ發刊セリ吾人ハ此報ノミニヨリテモ我國ノ業績ヲ讀ミ漏スコトシ是レ本邦未曾有ノ擧ナリトス

東京市小石川區駕籠町

東京醫科大學精神病學教室內

日本神經學會事務所

（電話番町一〇九番）

次回發刊の第四十六號は六月中に配附すべく原稿〆切を五月十日と定む續々御投稿あらんことを冀ふ

四月　　十全會雜誌部

金澤醫學專門學校 十全會會則摘要

（明治三十八年五月改正ス）

一本會ハ本校職員、卒業生、學生及本校ニ緣故アル者ヨリ成リ職員及卒業生ヲ特別會員トシ學生ヲ通常會員トシ本校ニ緣故アル者ヲ贊助會員トス

本校職員卒業生及學生ハ總テ本會會員タルノ義務アルモノトス

一本會ニ講話部、雜誌部、學術實習部、ロンテニス部、劍道部、柔道部及弓術部ノ七部ヲ置ク

一本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會員ノ負擔トス

本校職員タル特別會員（校內特別會員）ハ會費トシテ相當ノ金額ヲ寄附スベキモノトス

本校卒業生タル特別會員（校外特別會員）ハ會費トシテ一ケ年金壹圓ヲ納ムベシ但シ一時ニ金參圓ヲ納ムル者ハ五ケ年ヲ一期トシ該期間本會發行ノ雜誌ヲ配布ス

將來卒業ノ特別會員ハ最終授業料納付ノ節必ス一時ニ三ケ年間ノ會費金參圓ヲ納ムベシ

通常會員ハ會費トシテ一ケ年金壹圓八拾錢ヲ納ムベシ

特別會員ニシテ引續キ三ケ年間會費未納者ハ除名ノ上一般會員ニ通告ス

一本會ノ會計年度ハ毎年九月ニ始リ八月ニ終ル

一講話部ニ於テハ毎年一回以上講師ヲ聘シテ道義上ノ講話ヲ聽聞シ又隔月一回醫學及藥學ニ關スル講談會ヲ開ク

講話部ニ於テハ特ニ語學會ヲ開クコアリ

一雜誌部ニ於テハ毎年五回醫學及藥學ニ關スル會員ノ演說、談話並ニ本校ノ現況、會員ノ動靜等ヲ記載シタル雜誌ヲ發行シテ會員ニ頒ツ

一學術實習部ニ於テハ專ラ小野慈善院ノ患者ニ就キ診察治療ヲナシ學生ヲシテ臨床實習及調劑實習ヲナサシム

（運動部規定ニ關スル規定摘要ハ畧ス）

▲投稿者心得七則▼

一投稿用紙は中折紙を用ゐ必ず楷書たるべし殊に洋字は字體を明かに記入せらるべし

一端書洋紙等に認めたるもの又は字體亂雜なるものは總て沒書とす

一誌上匿名を望まるゝも原稿には必ず住所姓名を記入せらるべし

一言の政治に涉り或は德義に背くものは一切登載せず

一未完の原稿は採錄せず

一原稿採否の權は編輯長にあり

一一旦寄送せられたる原稿は返戻の需めあるも之に應せず

十全會雜誌部

明治四十年四月十三日印刷
明治四十年四月十六日發行

編輯兼發行者　石川縣金澤市池田町二番丁廿一番地　山本兵三郎

印刷者　石川縣金澤市尾張町八十二番地　宇野孝太郎

印刷所　同所　活文堂【電話六十五番】

發行所　金澤醫學專門學校十全會